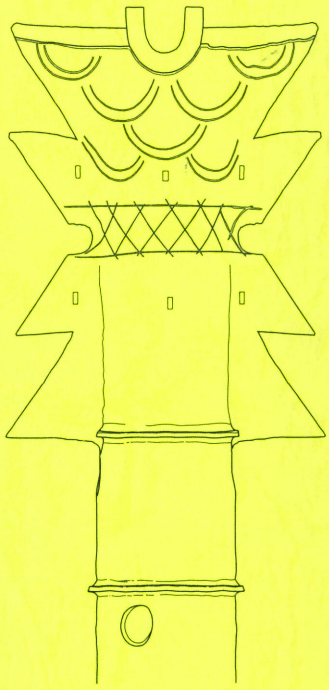
長岡京市埋蔵文化財調査報告書

第５４集



２０１０

財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター

（1）調査区全景（東から）

（2）調査区全景（西から）

（1）１トレンチ全景（東から）

（2）２トレンチ全景（西から）

序　　文

長岡京市では「すみつづけたい　みどりと歴史のまち　長岡京」をめざして街づくりに取り組んでおります。

JR長岡京駅を起点とした幹線道路の整備である、長岡京駅前線整備事業に伴う発掘調査も今回でひとつの区切りとなりました。

市街地のため複数次に分割した調査がこれまで継続的に実施され、すでに長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第16・24・28・30・34・36・39・44・52・53集として報告されております。

今回報告する調査でも、長岡京の六条条間小路南側溝と南側の宅地部分、塚本古墳後円部周壕に関する遺構・遺物が多数確認され、多くの新知見がもたらされました。

今後は個々の調査単位に留まることなく、広く周辺の調査を総合することによって、各時代の様相をより具体的に解明する作業が必要となってきます。この作業によって、地域の歴史が鮮明に浮かび上がってくることでしょう。これが市民の知的財産とし親しまれ、広く活用されることを望んでやみません。

最後になりましたが、調査の実施・整理にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係機関、関係者の方々に厚くお礼申し上げますとともに、今後もなお一層のご支援を賜りますようお願い申しあげます。

平成22年12月

財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター

理事長　　芦　田　富　男

凡　　例

1．本書は、長岡京駅前線西伸事業に伴って実施した調査のうち、平成21年度に行った右京第989次調査と、平成22年度に行った右京第1002次調査に関するものである。

2．調査は、長岡京市都市整備課から委託を受けた（財）長岡京市埋蔵文化財センターが実施し、右京第989次調査は平成22（2010）年２月１日から平成22（2010）年３月10日まで行い、調査面積は136㎡、右京第1002次調査は平成22（2010）年６月14日～平成22（2010）年７月27日まで行い調査面積は215㎡である。右京第989次調査は（財）長岡京市埋蔵文化財センター調査係長岩崎　誠が、右京第1002次調査は同じく主査木村泰彦が担当した。

3．調査の対象となった遺跡は、右京第989次調査が右京六条二坊六町、開田遺跡、塚本古墳、右京第1002次調査が右京六条二坊六町、開田遺跡である。

4．長岡京跡の調査次数は、右京域と左京域に分けて調査件数を通算したものである。調査地区名は、基本的に前半は奈良国立文化財研究所による遺跡分類表示、後半は京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（1977年）収録の旧大字小字名をもとにした地区割りに従った。

5．長岡京の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第４号の復原に従った。

6．本文の（注）に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第２集（1985年）に従って略記した。

7．長岡京跡に関する調査では、遺構番号は調査次数＋番号が正式なものであるが、本書では煩雑を避けるために調査次数を省略している。

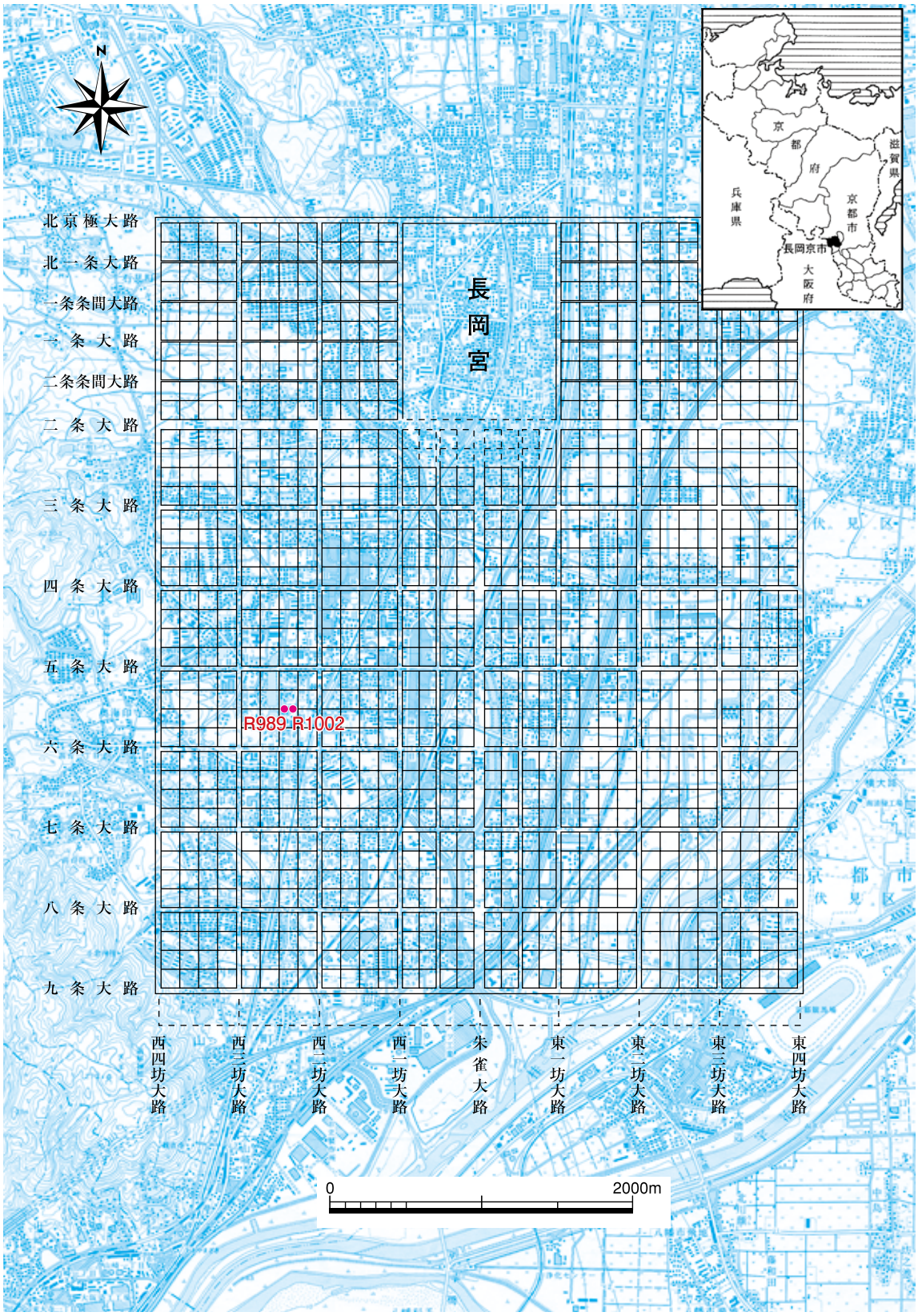
8．本書挿図の土層名で（　）を付けて示した記号は、『新版標準土色帳』（1997年版）のＪＩＳ表記法による土色である。

9．本書で使用している国土座標は、旧座標系第Ⅵ系である。北緯・東経もそれによっている。

10．遺物写真は、（財）京都市埋蔵文化財研究所に撮影を依頼した。

11．本書の編集は、木村泰彦が行い、執筆は第１章１～４を岩崎　誠、５付編を小田桐淳、第２章を木村が行った。

※表紙イラスト　右京第972次調査出土石見型盾形埴輪



第１図　長岡京と調査地の位置（1/40000）

本　文　目　次

序　　文 …… i
凡　　例 …… ii
第１章　長岡京跡右京第989次（7ANKHT-13地区）調査概要
　１　調査経過 …… 1
　２　検出遺構 …… 2
　３　出土遺物 …… 15
　４　ま と め …… 17
　５　付　編 …… 19
第２章　長岡京跡右京第1002次（7ANKHT-14地区）調査概要
　１　調査経過 …… 29
　２　検出遺構 …… 30
　３　出土遺物 …… 40
　４　ま と め …… 43

図　版　目　次

長岡京跡右京第989次調査

巻頭図版　1　（1）調査区全景（東から）
　　（2）調査区全景（西から）

長岡京跡右京第1002次調査

巻頭図版　2　（1）１トレンチ全景（東から）
　　（2）２トレンチ全景（西から）

長岡京跡右京第989次調査

図版　1　（1）調査区西半部（東から）
　　（2）塚本古墳周濠ＳＤ37検出状況（北西から）
図版　2　（1）塚本古墳周濠ＳＤ37埴輪出土状況（北から）
　　（2）塚本古墳周濠ＳＤ37完掘状況（北東から）
図版　3　（1）掘立柱建物ＳＢ18（北西から）
　　（2）掘立柱建物ＳＢ18と近隣柱穴群（西から）
図版　4　（1）掘立柱建物ＳＢ14（東から）
　　（2）溝ＳＤ12（南から）
図版　5　（1）調査区全景（東から）
　　（2）調査区全景（西から）
　　（3）調査区全景（東から）
図版　6　（1）出土埴輪
　　（2）出土遺物
図版　7　（1）出土埴輪
　　（2）出土遺物
図版　8　（1）出土埴輪
　　（2）出土遺物

長岡京跡右京第1002次調査

図版　9　（1）調査地全景（東から）
　　（2）調査地全景（西から）
図版　10　（1）１トレンチ全景（東から）

（２）掘立柱建物ＳＢ01（北から）
図版　11　（１）２トレンチ上層遺構（西から）
（２）２トレンチ上層遺構（南から）
図版　12　（１）２トレンチ下層遺構（西から）
（２）２トレンチ下層遺構（南から）
図版　13　　出土遺物
図版　14　（１）出土土師器
（２）出土須恵器

挿　図　目　次

第１図　長岡京と調査地の位置（1/40000）…… iii
第２図　発掘調査地位置図（1/5000）…… 1
第３図　調査区土層図-１（1/50）…… 3
第４図　調査区土層図-２（1/50））…… 4
第５図　遺構配置図（1/100））…… 6
第６図　中世溝ＳＤ09実測図（1/100）…… 7
第７図　中世遺構配置図（1/200）…… 7
第８図　長岡京期遺構配置図（1/200）…… 8
第９図　溝ＳＤ12実測図（1/50）…… 8
第10図　掘立柱建物ＳＢ14実測図（1/50）…… 9
第11図　掘立柱建物ＳＢ18実測図（1/50）…… 10
第12図　柱穴群実測図（1/50）…… 11
第13図　古墳時代遺構配置図（1/200）…… 13
第14図　塚本古墳周壕ＳＤ37実測図（1/50）…… 13
第15図　塚本古墳周壕ＳＤ37埴輪出土状況実測図（1/20）…… 14
第16図　出土遺物実測図（1/6・1/4）…… 16
第17図　３トレンチ部分図（1/100）…… 19
第18図　溝ＳＤ43断面図（1/50）…… 20
第19図　遺物実測図－１（1/4）…… 23
第20図　遺物実測図－２（1/4）…… 24
第21図　遺物実測図－３（1/6）…… 25
第22図　遺物実測図－４（1/6）…… 26
第23図　遺物実測図－５（1/6）…… 27
第24図　遺物実測図－６（1/6）…… 28
第25図　１トレンチ作業風景（南東から）…… 29
第26図　２トレンチ作業風景（南から）…… 29
第27図　調査区配置図（1/400）…… 30
第28図　１トレンチ北壁土層図（1/50）…… 31
第29図　１トレンチ平面図（1/100）…… 32
第30図　掘立柱建物ＳＢ01平面図（1/50）…… 33
第31図　ＳＢ01-Ｐ８（北から）…… 34
第32図　ＳＢ01-Ｐ９（北から）…… 34

第33図　ＳＢ01-Ｐ11（南から）　…… 34
第34図　溝ＳＤ02、Ｐ１・２断面図（1/40）　…… 35
第35図　溝ＳＤ02（西から）　…… 35
第36図　溝ＳＤ02断面（東から）　…… 35
第37図　Ｐ２検出状況１（南から）　…… 35
第38図　Ｐ２検出状況２（南から）　…… 35
第39図　２トレンチ北壁・東壁土層図（1/50）　…… 36
第40図　２トレンチ平面図（1/100）　…… 37
第41図　溝ＳＤ03（南から）　…… 38
第42図　落込みＳＸ14全景（東から）　…… 38
第43図　落込みＳＸ14遺物出土状況（南から）　…… 38
第44図　２トレンチ検出遺構断面図（1/50）　…… 39
第45図　出土遺物実測図（1/4）　…… 41
第46図　調査地周辺図（1/1000）　…… 43

付　表　目　次

付表－１　出土遺物観察表　…… 21
付表－２　落ち込みSX14出土土器破片計数表　…… 44
付表－３　報告書抄録　…… 巻末

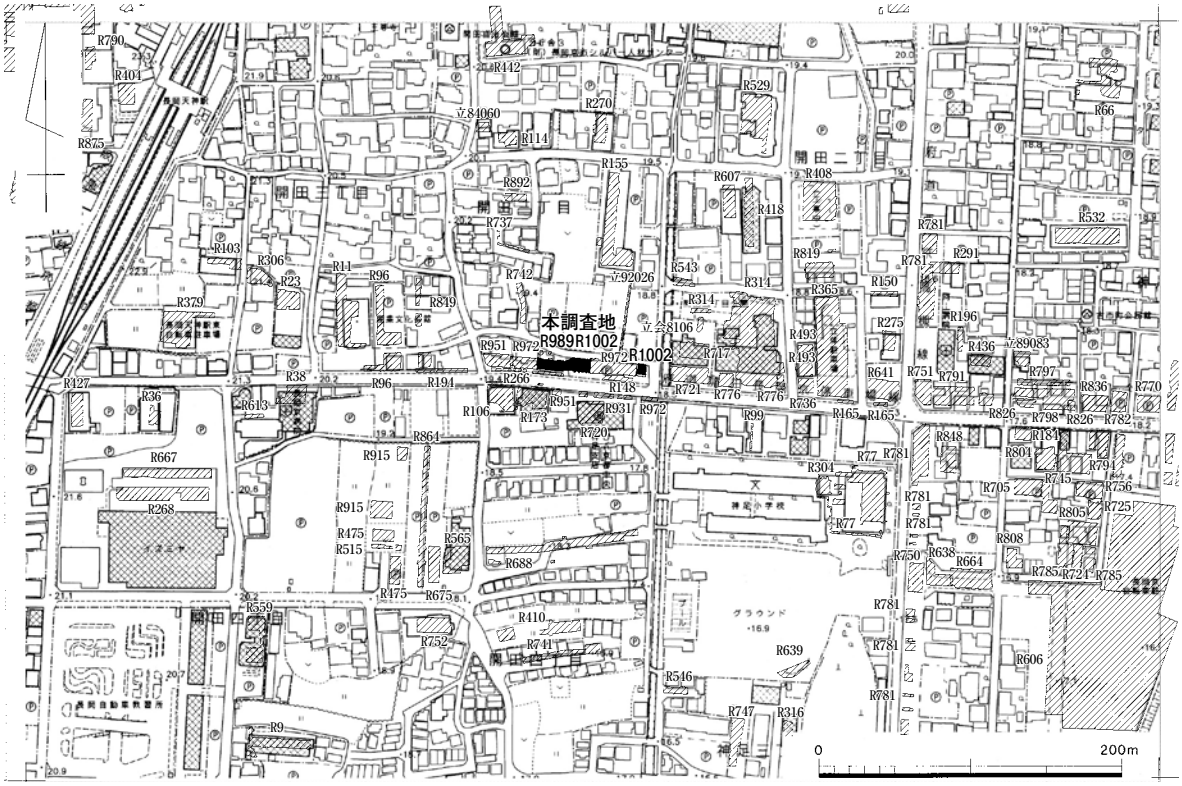
第１章　長岡京跡右京第989次（７ＡＮKHT－13地区）調査概要

―長岡京跡右京六条二坊六町・開田遺跡・塚本古墳―
長岡京市の長岡京駅前線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

１　調査経過

本報告は、平成22年２月１日から３月31日まで、長岡京市の長岡京駅前線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、長岡京市開田三丁目702－13の一部および702－14の一部で実施した長岡京跡右京第989次調査に関するものである。当調査の総面積は、136㎡となった。調査地は、ＪＲ長岡京駅から西約430m、阪急長岡天神駅から約300m南東に位置する。立地は、調査区西半部の緩扇状地から東半部の氾濫原Ｉにまたがる。調査区の地表面標高は、19.2m、中心座標は、国土座標第Ⅵ系でＸ＝－119,700、Ｙ＝－27,567.5である。

今回の調査区には、1981年の民間開発に伴い、立会8104次調査が実施された地点を含む。また、南接する府道開田長岡京停車線の北辺部拡幅に伴い、（財）京都府埋蔵文化財調査研究センターにより、長岡京跡右京第266次調査が実施されている。このほか、当調査区隣接地域では、当センターにより、長岡京跡右京第972次調査が実施され、当調査区の西辺は、その第３トレンチ東辺とつながる。さらに、当調査区の東約20mでは、同調査第２トレンチが設定されて調査が行われている。このような周辺部の調査成果をふまえ、当調査では、塚本古墳の一部と長岡京跡関係などの関連遺構の検出が予想できた。



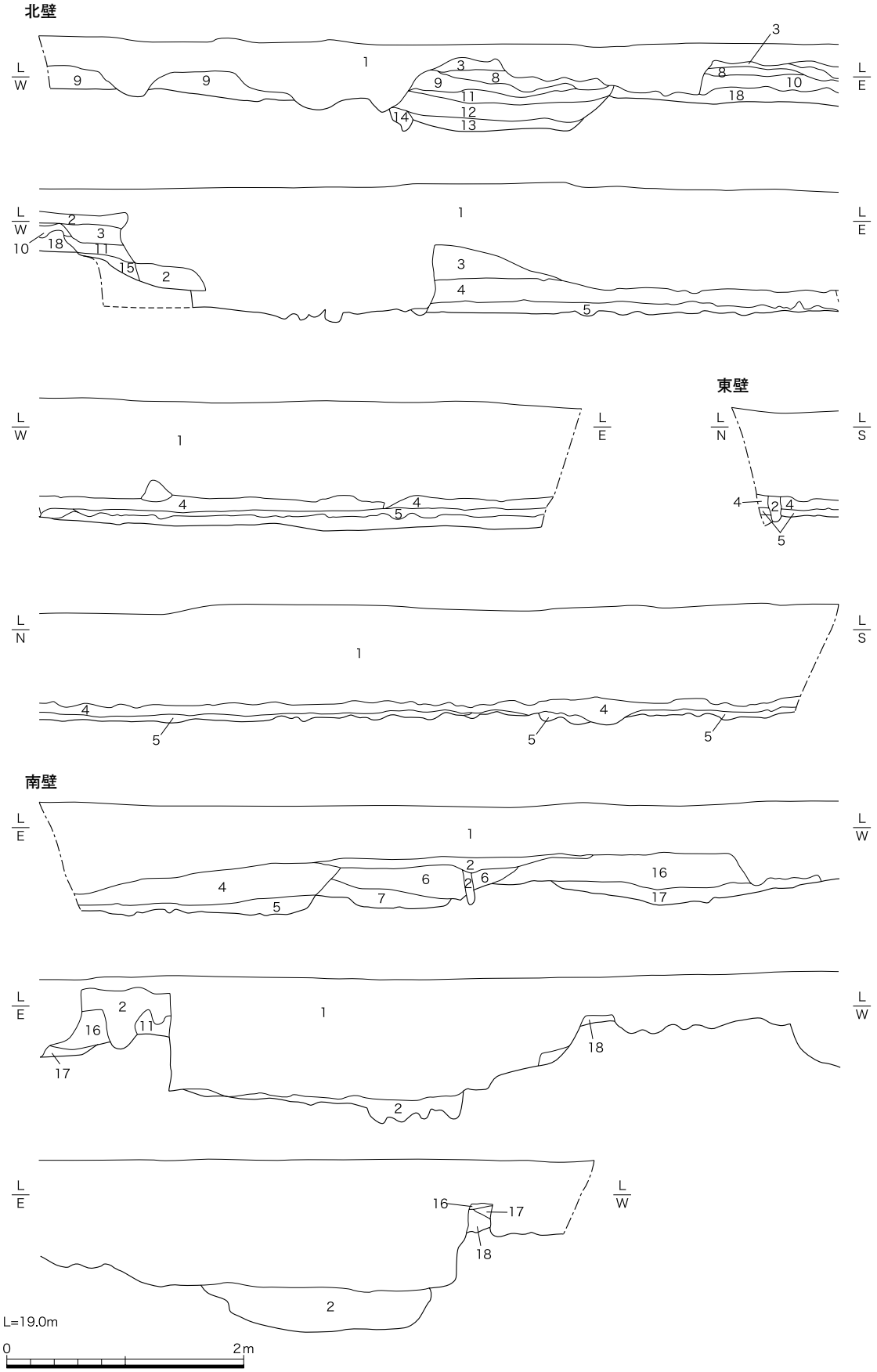
第２図　発掘調査地位置図（1/5000）

２　検出遺構

（１）旧地形および近代遺構と土層堆積（第３～５図）

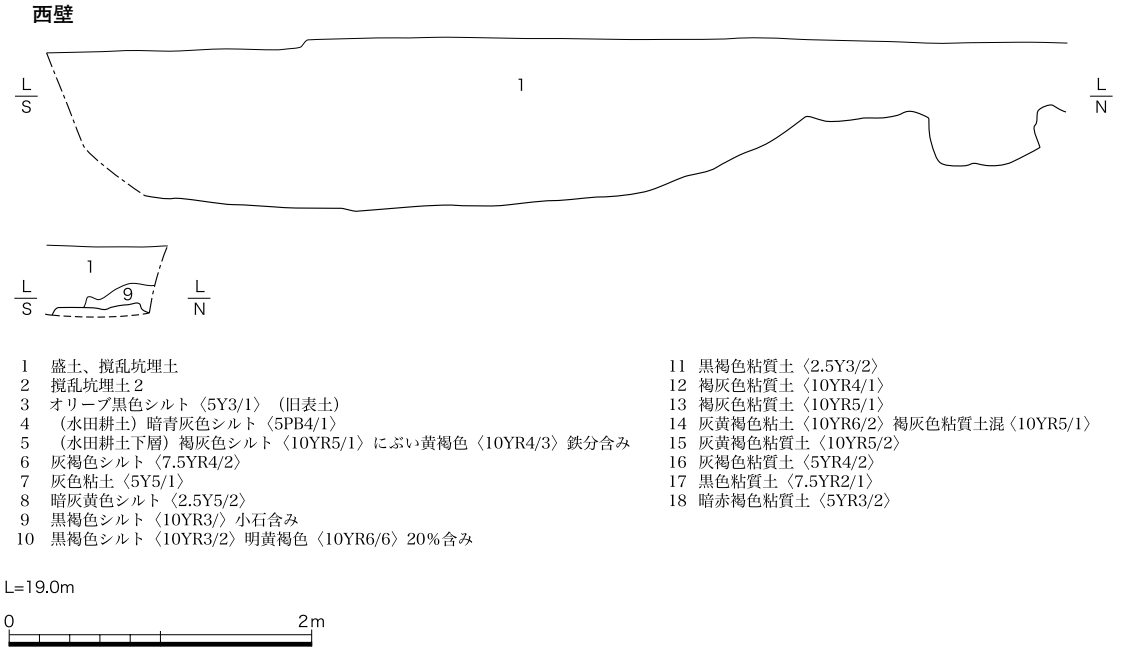
当調査区は、後に述べる中世溝ＳＤ09より東で北東方向に傾斜し、さらにその溝より東約４ｍで、旧表土より約80㎝の段差をもって低くなっていた（第５図ＳＫ10）。地形分類では、南西から北東方向へ降る傾斜部は、西部の緩扇状地と東部の氾濫原Ｉの境をなしているものと考えられる。ただし、基盤層は一連の同色同質層からなっており、変化は認められない。この地形変換線にあたる段差の所在位置には、近世溝ＳＤ13があり、本来北東方向に傾斜する地形を近世の開墾により棚田状に水田化されたものと考えられる。このような近世の地形改変により、北東部が一段低くなっていた地形をほぼ水平な地表面になるまで盛土され、現在の平坦地に造成されていることが明らかになった。これを示すように、宅地造成盛土は、西端で約23㎝と浅く、東端部は約80㎝と非常に厚くなっていた。一段高い西部には、1981年に実施した第8104次立会調査の工事掘削攪乱抗を４箇所検出した（第５図攪乱抗ＳＫ04・06・07・17および、各方形掘り込みを繋ぐ梁掘削坑ＳＫ05・08など）。これらの攪乱坑と、後に述べる塚本古墳周壕の位置関係から、第8104次立会調査で採取された埴輪の大部分は、攪乱抗ＳＫ04・05と名付けた攪乱抗からの出土であることが分かる。また、調査区中央には、近代溝ＳＤ13を削り、攪乱抗ＳＫ17などに削られている近代攪乱抗ＳＫ11がある。この遺構は、当所が農地開墾された後に宅地化された際の掘削坑と考えられる。なお、近代溝ＳＤ13は、北東方向に傾斜する地形の裾部に掘られていることから、農地開墾の初期に掘られた農耕用水路と考えられる。断面図では表現できなかったが、この溝は、灰色粘土を基調とする埋土で、最下層には非常に薄く砂層堆積が見られ、流水期があったと考えられる。この溝より北東部は、黄橙色無遺物層が水平面を成し、その上に水平堆積をなす２層の耕作土が見られた。黄橙色無遺物層上面には、無数の細い杭跡があり（図版５（１）～（３））、中には朽ちた竹杭も見られた。これらの杭跡は、近代農耕に関連する杭群と考えられる。耕作土が水平堆積であることから、耕土や杭群などの遺構群は、稲作に関わるものと考えられる。一方、西部の一段高い部分では、部分的に耕作土と考えられる堆積が見られたが、激しく攪乱を受けていた。耕作土の残存状況は良くないが、東部の状況と対比すると、きれいな水平面にはなっておらず、畑作耕土の可能性や、荒れ地表土の可能性も考えられる。この層の下には、土師器皿や瓦器椀の細片を含む中世包含層が見られた。西から東への傾斜部分では、一段低まった地域に見られる２層の耕作土（第４・５層）の上に被さるように、一段高い西方地域で旧表土をなす第２・３層が厚く堆積していた（第３図北壁土層図２段目参照）。この層位関係から、中世堆積層や黄橙色基盤層を切り土して、低い地形側に近世の水田開墾の手が加わり、その後近代に切り土崖面側に高所の表土層が堆積してなだらかな傾斜面となって宅地化された経緯が推定できる。また、高い立地の西部で一部に見られた中世堆積層を除去する段階で、近世溝ＳＤ13や近代段差の方向と同方向に掘られた中世溝ＳＤ09を検出した。

以上の層位関係や切り合い関係から、中世以後の当地区の変遷を、次のように捉えることができる。まず、本来南西から北東方向に傾斜する自然地形であった。中世の13世紀頃、その傾斜部



第３図　調査区土層図－１（1/50）

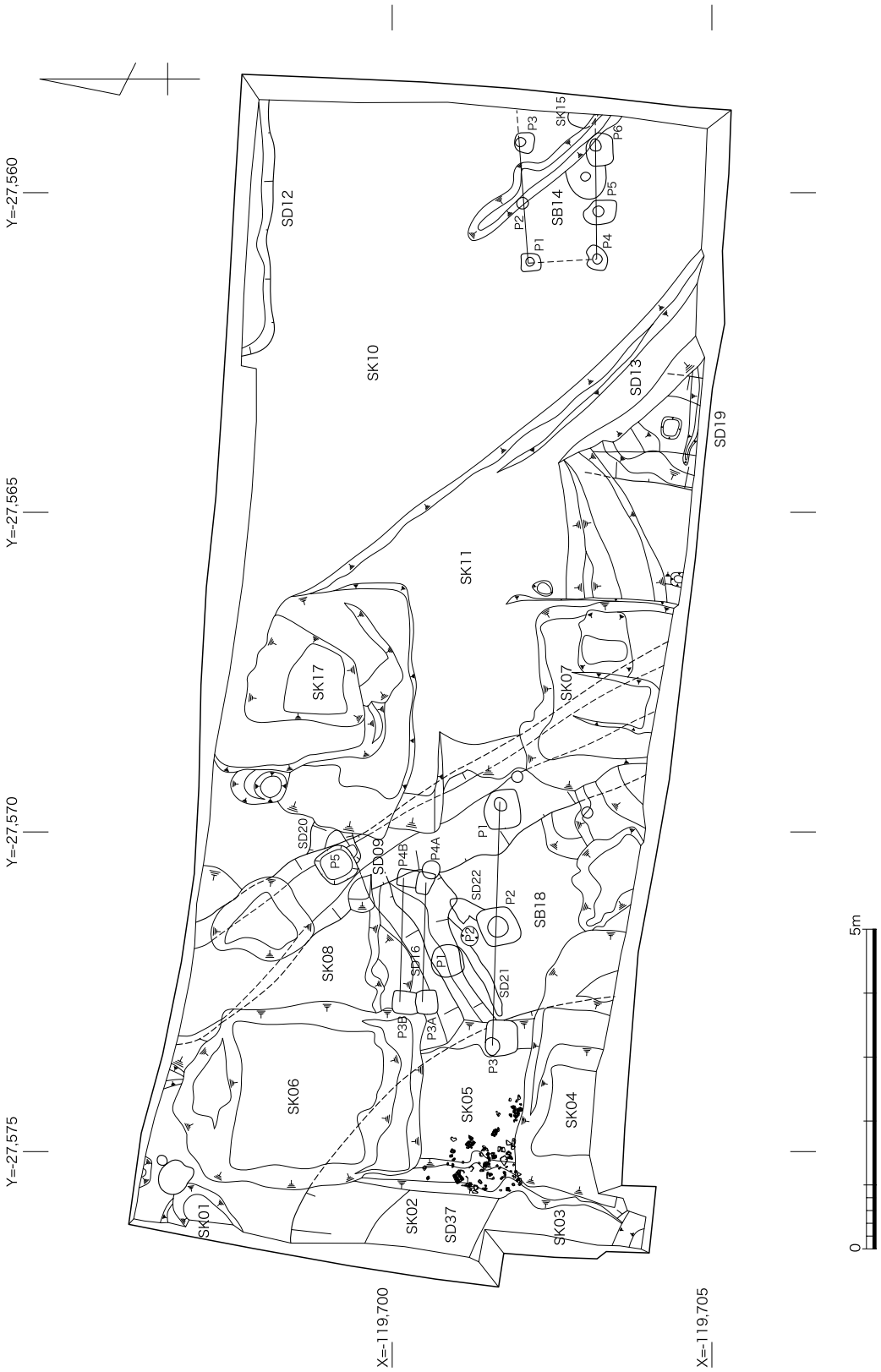
上方に、地形に沿って溝ＳＤ09が設けられた。おそらく、この溝より西に、中世集落があったものと考えられる。近世段階には、傾斜地裾部付近に地形に沿って溝ＳＤ13が設けられ、これより東を水田（ＳＫ10）とされた。この水田は近・現代にまで維持されていたが、傾斜面は高い西の方の高さに近くまで平均化され、宅地化されるに至った。この開発に伴い、傾斜地の一部が掘削された（ＳＫ11など）。その後も、調査区北東部は水田として、一段高い南西部は10～20㎝の盛土で造成される段階を経て、住宅として土地利用されてきた。住宅部では、1981年に倉庫が建てられ、その基礎工事に伴って部分的に深く掘り込まれた（攪乱抗ＳＫ04～08・17など）。その後、東部の水田が埋め立てられ、西部の住宅地とほぼ同じ高さにまで、地盤改良材を混入させた盛土造成（厚さ約80㎝）され、駐車場として土地利用されるに至った。西部の一段高い部分では中世遺物包含層下が無遺物基盤層であり、一段低い東部では近・現代耕作土下が無遺物基盤層であり、その上面から長岡京期やそれ以前の遺構が同一面で検出された。長岡京期以前の検出遺構として顕著なものに、後述する塚本古墳の周壕があるが、この古墳の位置は、当調査区の一段高い西部に位置し、前方後円墳の中軸を前方部から北東方向に向けている。立地は、北西方向から広がる緩扇状地の東端部に位置し、緩扇状地とその先の氾濫原Ｉの境は、北西から南東方向にあり、その変換線方向と、古墳の中軸方向がほぼ直交方向にある。つまり、塚本古墳は、地形に即して構築されたと考えられる。一方、長岡京期の遺構群は、当然のことながら、東西南北の条坊地割り基準方向に規制されていると考えられる。事実、かつての調査で、古墳周壕内から長岡京期の遺物出土が報告され、長岡京期に整地されて宅地利用されていたと考えられている。当調査でも、長岡京期の掘立柱建物柱穴が、古墳周壕埋土を掘り込んでいることを確認した。また、これらの地区で長岡京期以後から鎌倉時代以前の遺構や遺物が皆無である。つまり、古墳時代には地形に



第４図　調査区土層図－２（1/50）

即した土地利用であったが、長岡京期には条坊制に沿った宅地割りと施設配置がなされたにもかかわらず、平安時代の空白期をおいて、鎌倉時代以後、再び地形に沿った土地利用がなされるに至ったことがうかがえる。

ところで、当調査地に南接する府道開田長岡京停車場線の北約10mには、併走する開田川と幅員６ｍ道路や地境がある。この川と道路や地境線は、長岡京六条条間小路の遺存地割りの可能性があるが、塚本古墳所在位置を北に迂回するかのように、当調査区東辺から北に弧を描いて張り出している。一見、まるで古墳が残存していたがために、道路が迂回させられているように見える。ところが、先に見たように、明らかに長岡京期には塚本古墳は解体され、周壕を埋めて整地され、条坊制の規制に従った南北または東西方向の柱筋をもつ掘立柱建物を配置した宅地利用がなされていたのである。そこで気になるのが、当調査区で検出した中世以後の土地利用のあり方である。平安遷都後の状況は分からないが、鎌倉時代には、地形にそった方向に溝が設置されており、近世以後の開発においても、緩扇状地と氾濫原Ｉとの土地利用のあり方が異なり、地形にそった開発・開墾が進められてきた。言い方を変えれば、自然地形が観察できないまでに整地されたのは、つい最近のことなのである。このような見方からすれば、長岡京期の条坊制に規制された開発の段階にあっても、塚本古墳の解体は周壕を埋めて整地されはしたが、古墳周辺部とレベルをあわすまでの整地にはいたらなかったのではないかと思われる。古墳の形状は消滅したとはいえ、その僅かな高まりとして痕跡をとどめていたことから、もともと墓（塚）であったという伝承が残ったか、またはその推測から、「東塚本」という地名が生まれたのではないかと思われる。長岡京期より前の当地の名称は分からないが、長岡京期には違った呼び方をしていたに違いない。たとえば、平安時代中期頃成立とされる「類聚三代格」の巻15、延暦14年正月29日　諸司田事太政官符に、 合畠八町　長岡左京三条一坊八町・・・とあることなどから、右京何条何坊何町と呼ばれていた公算が大きい。だとすれば、「塚本」の呼び名は、長岡京以前の地名が復活したか、平安遷都後、または鎌倉時代以後から近世段階ころに名付けられたと考えるのが自然と思われる。そして、近世・近代に至っても、地形にそった土地利用が続き、長岡京期に僅かな高まりとして残った塚を避けるように、水路や道路が敷設されたのではないかと思われる。一方、1982年に前方部周壕付近を調査した木村泰彦氏は、その報告書で、「東塚本」という古墳にちなんだ地名が残ったのは、長岡京期に完全には削平されなかったからと解釈し、五条条間小路南側溝が、古墳所在箇所で未検出であることや、現在の道路が古墳所在部分を避けるように北に迂回していることから、塚本古墳は、長岡京期に整地用土取場としての利用はあったが、完全には破壊されなかったという考え方を表している。この捉え方は、現在も非常に有力な説であり、決して過去のものとして風化したわけではない。今後も、考古学の分野では概して攪乱として処理され、現地形にいたる経過を知るための俎上に上がらない、周辺部の近・現代開発に伴う痕跡をも捉えながら、検討を重ねる必要がある。ちなみに、旧小字名には、「西塚本」「東塚本」の２者が隣接してあり、この小字の方角を示す西・東の語句が、２つの古墳の存在を示すのか、塚のような高まりのある西側・東側という意味なのか、今のところ明確でない。



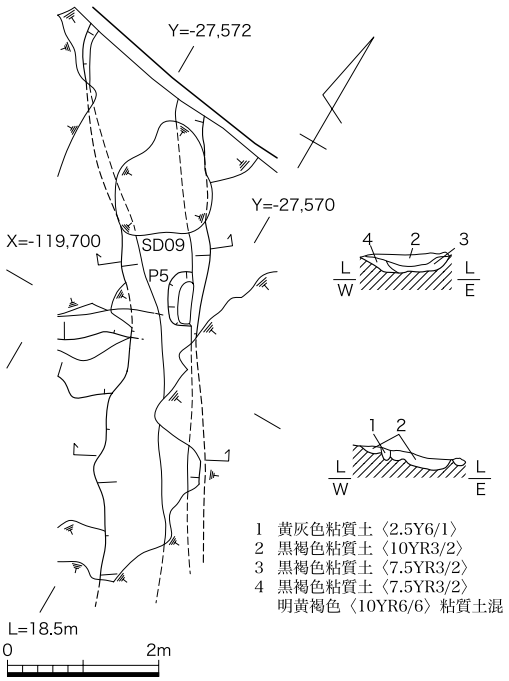
第５図　遺構配置図（1/100）

（２）中世の遺構（第６・７図）

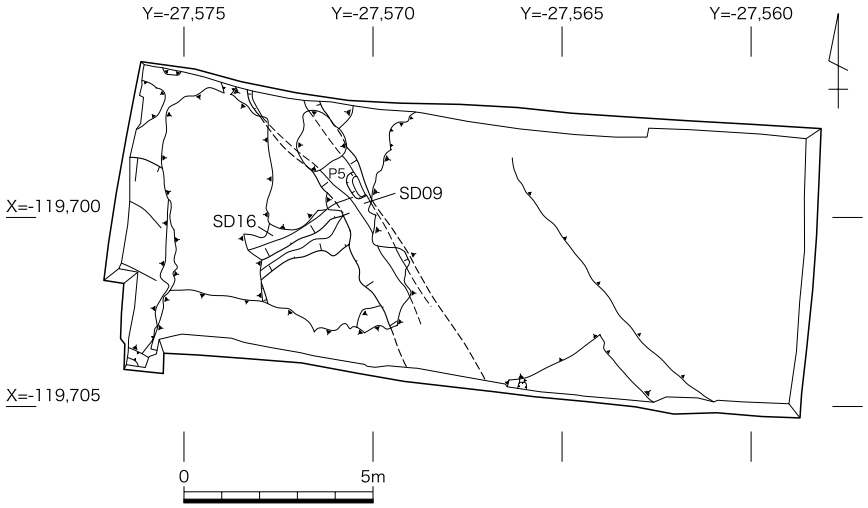
中世の遺構には、溝ＳＤ09と溝ＳＤ16がある。いずれも、調査区東半部の一段高い緩扇状地側から検出した。検出面は、中世包含層を薄く下げた任意の面であり、本来は、中世包含層上面からの掘り込みと考えられる。両溝とも、明確な流水による堆積は看取できなかった。明確な中世遺構は、この溝２条のみであるが、中世集落に関連した施設と考えられる。

溝ＳＤ09　最大幅約70㎝、深さ約30㎝で残存する溝である（第６図）。溝の方角は、北で西に約60°の振れをもって直線的に延びる。この方向は、緩扇状地と氾濫原Ｉの境をなす傾斜面の方向と同じである。断面は、「U」字形に近いが、あまり整っていない。埋土は、基本的に黒色系粘質土の３層からなる。埋土には流水の堆積は見られなかったが、溝底は北西から南東に傾斜していた。検出長は約９ｍあるが、大部分は近代に大きく攪乱され、残存状況は良くなかった。残存状況は調査区北壁で最も良く、この部分の断面観察できた状況が、本来の形状に最も近いと考えられる。

溝ＳＤ16　溝ＳＤ09に直行する方向に掘られたもので、南肩のみを検出した。埋土は２層からなり、上層は溝ＳＤ09の埋土と類似する土色・土質であったが、下層は異なり、黒色系粘質土に黄橙色系粘質土塊が斑紋状に混じる特徴をもつ。おそらく基盤層と攪拌された土層と考えられる。この埋土下層は、溝ＳＤ09との交差部分に見られないことから、当溝の方が古いと解した。深さは、約20㎝の残存状況で、溝ＳＤ09より浅い。当溝の南肩から溝底に至る斜面には、途中にテラス面をもち、２段落ちになっていた。検出長は約2.5ｍで、検出範囲の南西端は、現代攪乱坑ＳＫ05により削平を受けていた。



第６図　中世溝SD09実測図（1/100）

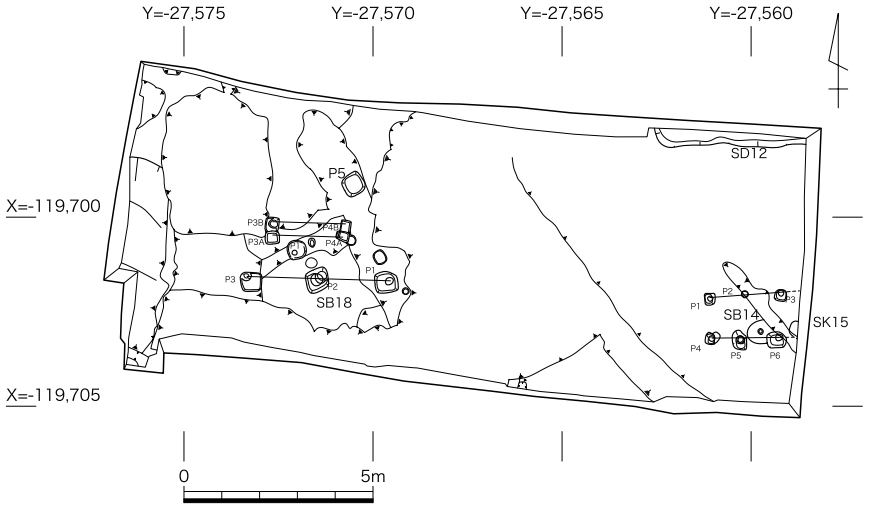


第７図　中世遺構配置図（1/200）

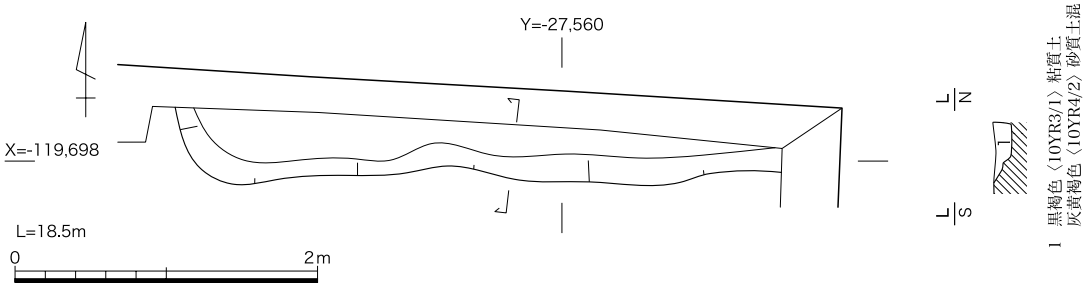
（３）長岡京期の遺構

長岡京期の遺構には、掘立柱建物ＳＢ14・ＳＢ18、土坑ＳＫ15、溝ＳＤ12の他、柱穴群（Ｐ１・３Ａ・３Ｂ・４Ａ・４Ｂ・５）などがある（第８図、図版５(1)～(3)）。各遺構の埋土は、暗褐色から黒褐色の粘質土を基調に、基盤層などが混じる場合がある。また中世遺構の埋土より、かなり粘土質が強い。さらに、各遺構の方向は、ほぼ国土座標の南北軸方向にあり、長岡京期の条坊制地割りに規制された遺構群と考えられる。各遺構間の距離は、溝ＳＤ12と掘立柱建物ＳＢ14の南北間が約4.2m、掘立柱建物ＳＢ14と掘立柱建物ＳＢ18の東西間が約8.4m、掘立柱建物ＳＢ18と柱穴Ｐ3Ａ―柱穴Ｐ４Ａの南北間が約1.2m、掘立柱建物ＳＢ18の東端柱穴Ｐ１と柱穴Ｐ４Ａの東西間が約1.2mという位置関係にある。このような距離間隔は、ほぼ長岡京造営尺で割れる数値に近いと言え、条坊制に規制された計画的配置と見ることができる。以下に、検出遺構ごとの観察結果を概観する。

溝ＳＤ12　調査区北東角で検出した。東西方向に直線的に掘られた溝である（第９図、図版４(2)）。深さ約10㎝、検出長約４ｍを測る。溝の北肩は調査区外にあり、確認できなかったが、国土座標第Ⅵ系でＸ＝119,696付近に中軸をもつと考えられる。この値は、長岡京跡右京第972次調査第２トレンチ検出の溝ＳＤ17や、同調査第１トレンチ検出の溝ＳＤ43、長岡京跡右京第972次調査検出の溝ＳＤ02に近い数値である。これらを一連の溝と考えた場合、長岡京条坊復原の六条条間小路南側溝、に推定できると思われる。



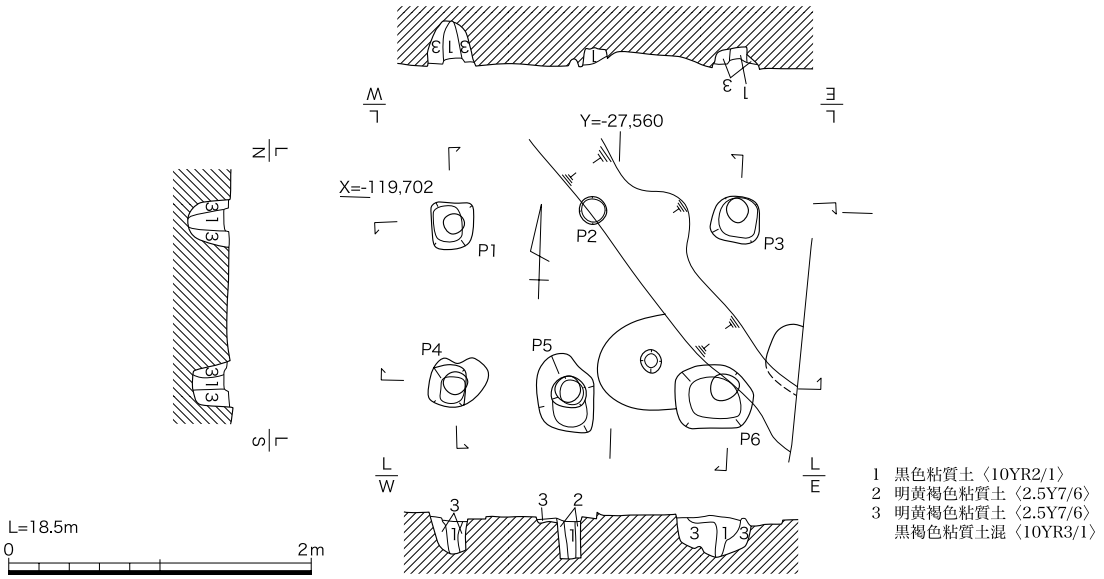
第８図　長岡京期遺構配置図（1/200）



第９図　溝ＳＤ12実測図（1/50）

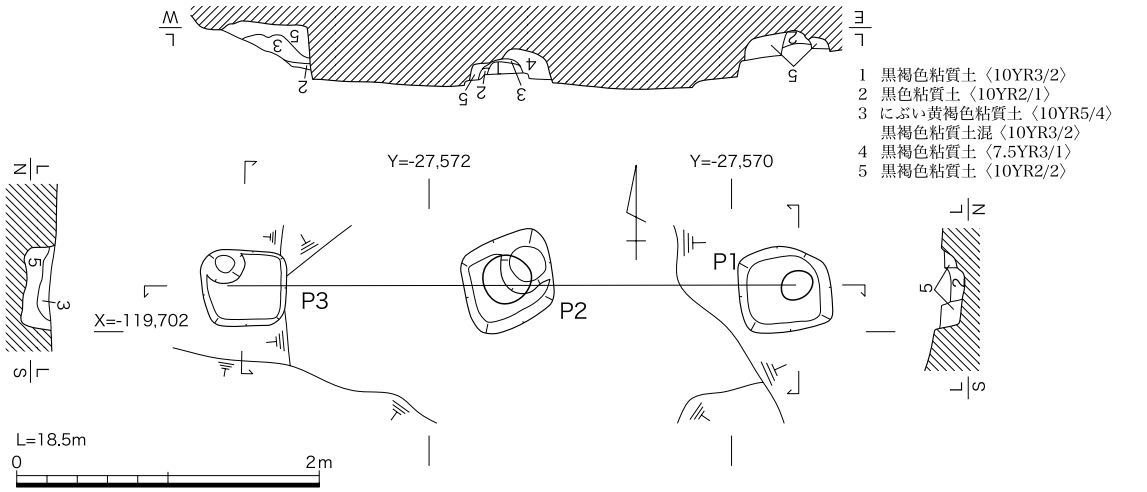
掘立柱建物ＳＢ14　南北１間、東西２間の小規模な建物で、平面台形をなす（第10図、図版４(1)）。北辺柱列の柱穴Ｐ１から柱穴Ｐ３間は1.9ｍで、柱穴Ｐ１と柱穴Ｐ２間は約90㎝、柱穴Ｐ２と柱穴Ｐ３間は約1ｍと、不等間である。南辺柱列の柱穴Ｐ４から柱穴Ｐ６までは、約1.8ｍで、柱穴Ｐ４と柱穴Ｐ５間は約80㎝、柱穴Ｐ５と柱穴Ｐ６間は約１ｍと、不等間である。また柱穴Ｐ１と柱穴Ｐ４間は約1.05ｍ、柱穴Ｐ３と柱穴Ｐ６間は約1.15ｍである。このように北辺柱列と南辺柱列はそれぞれ直線的に列ぶが、平行関係ではなく、西端より東端が10㎝広くなっている。掘立柱建物としてここに収録したが、先述のごとく、各柱間が不均等で、北と南の柱列が平行しないことや、建物とした場合、北辺から南辺までの間隔が狭いこと、北辺の柱穴と南辺の柱穴が相対関係にないことなどから、２列の柵とすべきかも知れない。柱痕は、各柱穴で看取でき、直径約15㎝が主流をなす。深さは、柱穴Ｐ１と柱穴Ｐ４～柱穴Ｐ６が25～30㎝と深く、柱穴Ｐ２と柱穴Ｐ３は10㎝前後と浅い。検出位置が、一段低い氾濫原Ｉの調査区東部であるのに、小規模な柱穴の深さが深い良好な残存状況であったことは、長岡京期の生活面からさほど削平を受けていないと考えられる。したがって、緩扇状地から氾濫原Ｉへの地形変化に大きく手を加えることなく宅地化されたと考えられる。掘形は、柱穴Ｐ２を除いて隅円方形を呈し、各辺25㎝前後の規模が基本をなす。柱穴埋土は、柱痕部が黒色系粘質土で各柱穴とも類似し、掘形埋土は、各柱穴掘削位置の基盤層の攪拌混入が見られる。北辺柱列の西延長線上の北約30㎝の位置に、掘立柱建物ＳＢ18の柱列がくる位置関係にある。当柱穴群が柵か建物かに関わらず、掘立柱建物ＳＢ18と深い関係にあると考えられる。

当柱穴群の南東部には、浅い土坑ＳＫ05がある。土坑の東部は調査区外にあり、全形は知り得なかった。直径約40㎝の円形に近い平面形の西半部と考えられ、深さは約５㎝の残存状況であった。埋土は１層で、柱穴群柱痕埋土に類似する。この柱穴群に伴うものかどうかは不明である。埋土に包含されていた土師器細片と、埋土が柱穴群に類似することから、長岡京期と判断した。



第10図　掘立柱建物ＳＢ14実測図（1/50）

掘立柱建物ＳＢ18　東西２間の柱列で、周辺部は攪乱坑により、大きく削られているため、どのような建物であったか、明らかにすることができなかった（第11図、図版３(1)）。この柱列の北には、先後関係のある重なり合った柱穴列（Ｐ3Ａ・Ｂ－Ｐ４Ａ・Ｂ）が近在してあることから、建物北辺柱列と考えられる。東西方向の柱間は、約2m等間で、長岡京跡右京第972次調査検出の掘立柱建物ＳＢ01の桁行き柱間に類似する。今回検出の柱列も、東西棟の掘立柱建物の北辺と考えられる。梁行きの東西両方向や、南辺桁筋が攪乱坑により大きく破壊されており、掘立柱建物とした場合の規模などは、明らかにできなかった。南北の推定梁行きは、柱間２～2.5mで２間とした場合、長岡京跡右京第266次調査範囲内にあるはずであるが、検出されていない。各柱穴の掘形は、一辺約60㎝の隅円方形で、掘立柱建物ＳＢ（または柵ＳＡ）14や、北側に位置する柱穴群（Ｐ3Ａ・Ｂ－Ｐ４Ａ・Ｂ）にくらべて大規模であり、また長岡京跡右京第972次調査検出の掘立柱建物ＳＢ01と類似する。各柱穴には、直径約20～30㎝の柱痕が認められ、柱痕も他の柱穴に比べて一回り太い。このような要素も、当柱穴群を掘立柱建物とする根拠である。柱穴の深さは、柱穴Ｐ１・Ｐ３が約30㎝で、柱穴Ｐ２は約25㎝の残存状況であった。溝ＳＤ12や掘立柱建物ＳＢ（または柵ＳＡ）14の検出面標高が約18.25mであるのに比べ、当建物検出標高が18.9mであり、比高差約65㎝あるにも関わらず、柱穴の深さがほぼ同じであることから、当時の生活面からの削平深度が同じと仮定して、この比高差が長岡京期から存在していたと考えられる。もしも長岡京期にも、中世溝ＳＤ09検出位置から東が北東方向への傾斜面だったとすれば、当遺構東端柱穴Ｐ１が掘立柱建物北東角柱であった可能性がある。また、柱穴Ｐ３は、塚本古墳後円部周壕の埋土を掘り込んで築かれている。このことは、少なくても周壕部は完全に埋め立てられていたことになる。この柱穴より西は、深い攪乱坑ＳＫ05（図版１(2)）や長岡京跡右京第972次調査での複雑な攪乱坑群により削平を受け、柱穴は検出できなかった。しかし、柱穴Ｐ３の西部表面が削平を受けていたとはいえ、古墳周壕との重なりが把握できた意義は大きい。また、もし当建物の桁行きが４間以上であったとすれば、建物の西辺が確実に後円部墳丘部分にまで達することになり、少なくとも後円部北半は、墳丘が削平され、建物が配置できる状況であったとことになる。



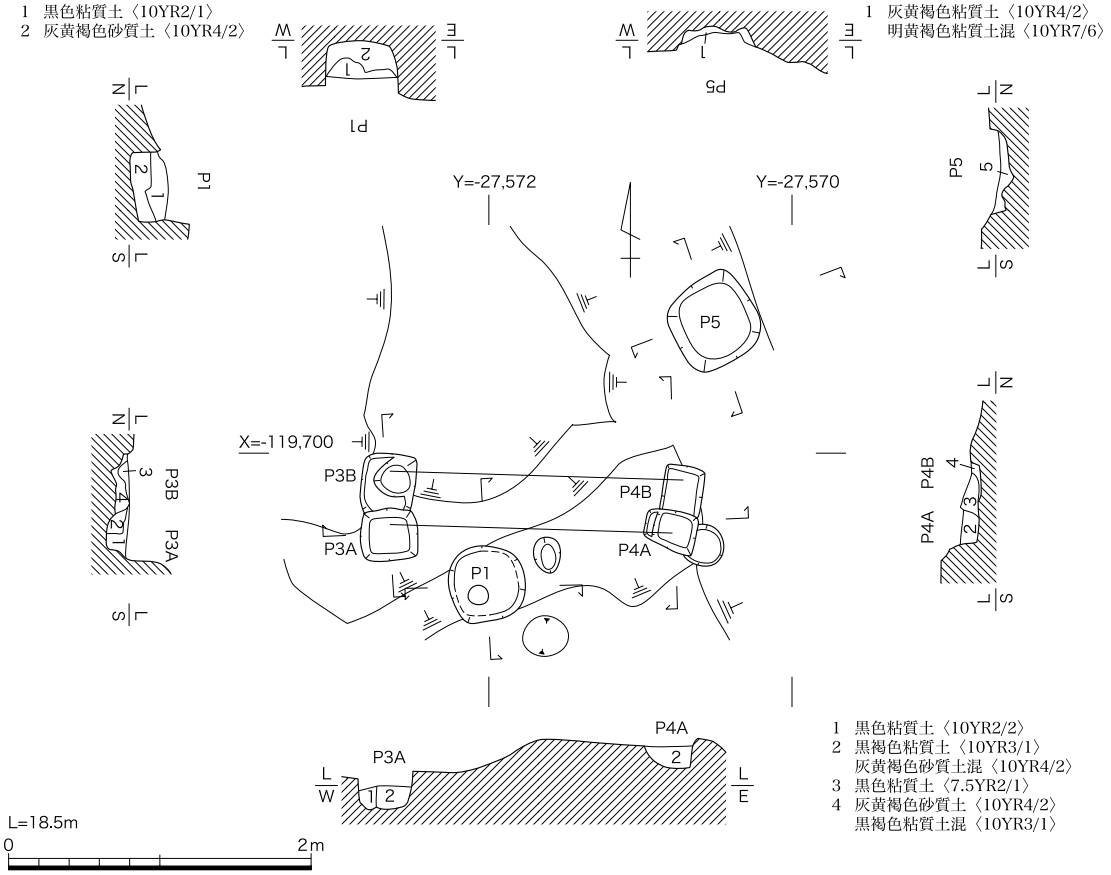
第11図　掘立柱建物ＳＢ18実測図（1/50）

柱穴群　建物や柵などのつながりが明らかにできなかった柱穴群（Ｐ１、P3A・B、Ｐ４Ａ・Ｂ、Ｐ５）である。このうち、柱穴Ｐ３Ａ・Ｂと柱穴Ｐ４Ａ・Ｂは互いに関連しあう東西方向の柱列になる可能性がある。

柱穴Ｐ１は、一辺約50㎝の隅円方形掘形で、南西よりに直径約15㎝の柱痕が見られた。掘形の形状と規模は、掘立柱建物ＳＢ18などに類似する。しかし、これに関連しあう柱穴は検出できなかった。

柱穴Ｐ３と柱穴Ｐ４は、それぞれ埋土の違いにより、ＡとＢに分けられ、ＢよりＡの方が新しい（第12図、図版３(2)）。柱穴Ｐ３と柱穴Ｐ４の間隔は、Ａ・Ｂともに約２ｍで、掘立柱建物ＳＢ18とほぼ同じである。また、東西に列ぶ２時期の柱列として捉えた場合、掘立柱建物ＳＢ18に平行する方向にある。柱穴Ｐ３Ａと柱穴Ｐ４Ａは、一辺約40㎝前後の隅円方形掘形で、中世溝ＳＤ16に削平されながら、深さ約30～40㎝の残存状況であった。柱穴Ｐ３Ｂと柱穴Ｐ４Ｂは、南北約40㎝、東西約35㎝の隅丸長方形掘形をもち、中世溝ＳＤ16の削平は各柱穴Ａより著しく、深さ約15㎝の残存状況であったが、中世溝検出面からは、深さ約40㎝になる。これらの掘形の形状や規模は、掘立柱建物ＳＢ（または柵ＳＡ）14に類似する。柱穴Ｐ３と柱穴Ｐ４は、掘立柱建物ＳＢ18の北に目隠し塀として配置された柵の可能性がある。

柱穴Ｐ５は、中世溝ＳＤ09に大きく削平を受け、深さ10㎝の残存状況であったが、中世溝ＳＤ09検出面からは約40㎝の深さになる。掘形は、一辺約45㎝の隅円方形である。



第12図　柱穴群実測図（1/50）

（４）　古墳時代の遺構

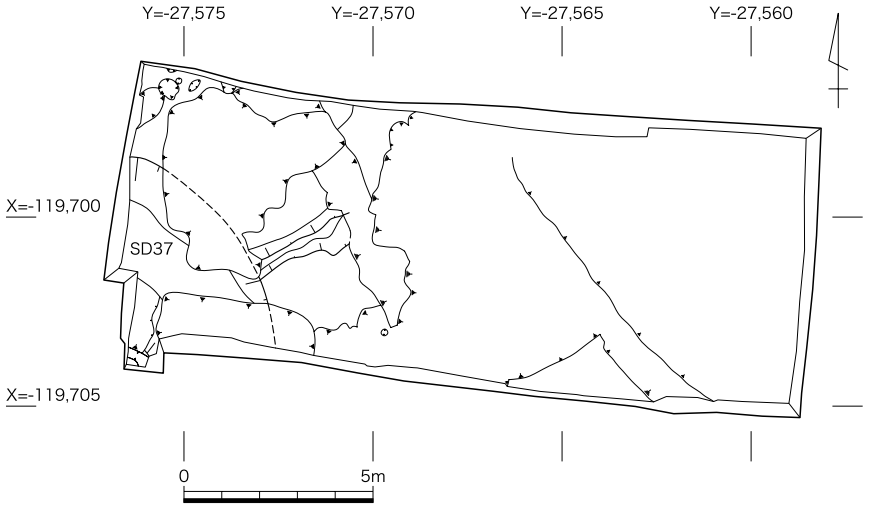
古墳時代の遺構には、塚本古墳の後円部周壕の一部（ＳＤ37）と、溝ＳＤ19がある（第13図、図版５(1)）。周壕部は重機による削平は著しく、大部分は周壕の底近くまで攪乱されていた（図版１(2)）。それでも、墳丘に立て置かれていたはずの埴輪が散乱して埋没した様子を記録することができた（第15図、図版２(1)）。溝ＳＤ19は、近世の開墾による削平が著しく、溝底部分の残存状況であった。

溝ＳＤ19　一段低い立地の調査区東部南辺で検出した南北方向の溝である。長岡京跡右京第266次調査で検出されている落ち込みＳＸ01の北延長部を検出したものと考えられる。幅約1.7ｍと広いが、削平著しく、深さ約15㎝の残存状況であった。埋土は黒色粘質土で、塚本古墳周壕に類似するため古墳時代に含めたが、出土遺物は皆無で、時期は確定的でない。

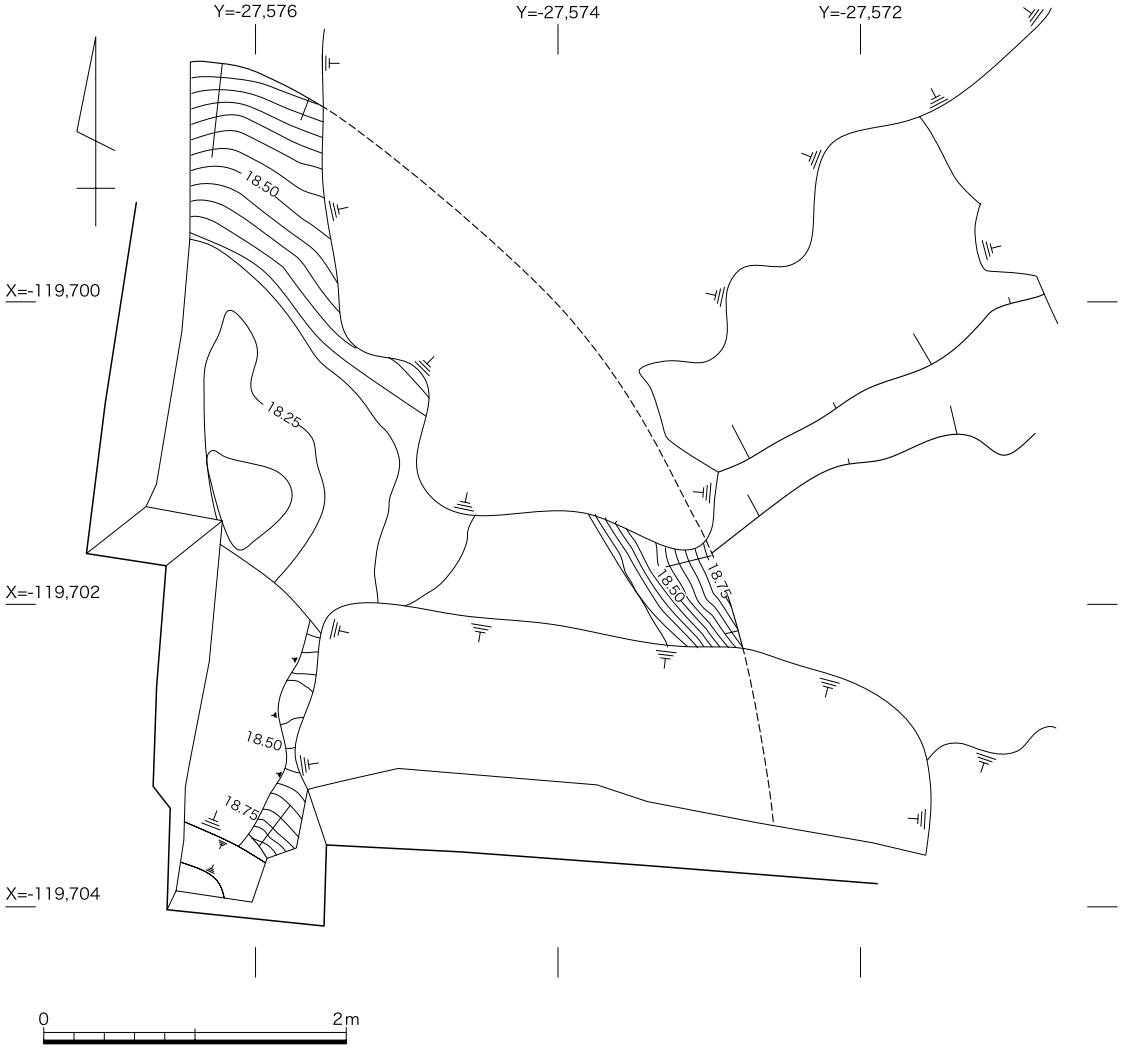
周壕ＳＤ37　円弧を描く掘形の周壕で、幅約４ｍ、深さは最深部で約70㎝の残存状況を呈する（第14図、図版２(2)）。後円部墳丘側の残存状況を確認する目的で、調査区南西部を南に一部拡張調査したが、攪乱坑ＳＫ03や下水管およびマンホール埋設坑などにより複雑に入り組んだ攪乱坑のため、残存状況は極めて悪かった。しかし、周壕外周標高とほぼ同じ標高面に基盤層を検出した幅約20㎝の範囲で、周壕の墳丘側肩部を検出することができた。今回の後円部墳丘側の調査部分でも、前回の長岡京跡右京第972次調査第３トレンチ同様に、墳丘盛土は残存せず、現代の削平が基盤層にまで達していた。

周壕部内堆積は、３層まで捉えることができた。周壕底には、基盤層上に厚さ約10㎝前後の薄い堆積があり、その上には厚さ約15㎝前後の堆積が見られ、上層には、厚い黒色粘質土が部分的に見られる残存状況であった。今回掌握できた周壕内埋土からの遺物出土量の傾向（図版２（1））は、上層にほとんど遺物を含まず、中層上面に多くの遺物散乱が見られ、下層には小片となった遺物が包含されている様相であった。出土遺物の内容を見ると、上層には埴輪小片と長岡京期の土器類小片が数点出土したにとどまる。中層からも、長岡京期の土器類小片が少量出土したほか、埴輪片を含んでいた。埴輪片には大型のものが含まれ、基底部が全周するものもあった。下層には、周壕底面の基盤層から僅か１～10㎝前後の堆積を挟んで埴輪片が多く出土した。この最下層には、他の時代の遺物は含まれていなかった。各層には、ほとんど礫を含んでいなかった。

今回の後円部周壕検出成果は、周辺部で明らかになってきた後円部径（約19～20ｍ）と後円部周壕幅（約3.5～４ｍ）の推定に当てはまる位置、形状と言える。この塚本前方後円墳の中軸は、北で約50°東に向く方向にある。この方向は、北で西に約50°の方向にある近世から現代の水田ＳＫ10の西肩方向に直行する。また近世溝ＳＤ13や中世溝09の方向と直行する方向に近く、中世溝ＳＤ16の方向にも近い。当古墳の南には緩扇状地の末端があり、西からの旧流路を挟んで後背低地になる。すなわち、当古墳の立地は、緩扇状地の南東角末端部に、地形に即して構築されている。古墳からみた場合、前方部前面から東側辺方向には氾濫原Ｉから後背低地が広がり、西辺側には、緩扇状地が広がる立地環境にある。南東方向に広がる氾濫原Ｉには、約１㎞先に恵解山古墳がある。この中期古墳も、北西から張り出す低位段丘西辺部を利用して築かれている。



第13図　古墳時代遺構配置図（1/200）



第14図　塚本古墳周壕ＳＤ37実測図（1/50）

第15図　塚本古墳周壕ＳＤ37埴輪出土状況実測図（1/20）

３　出土遺物

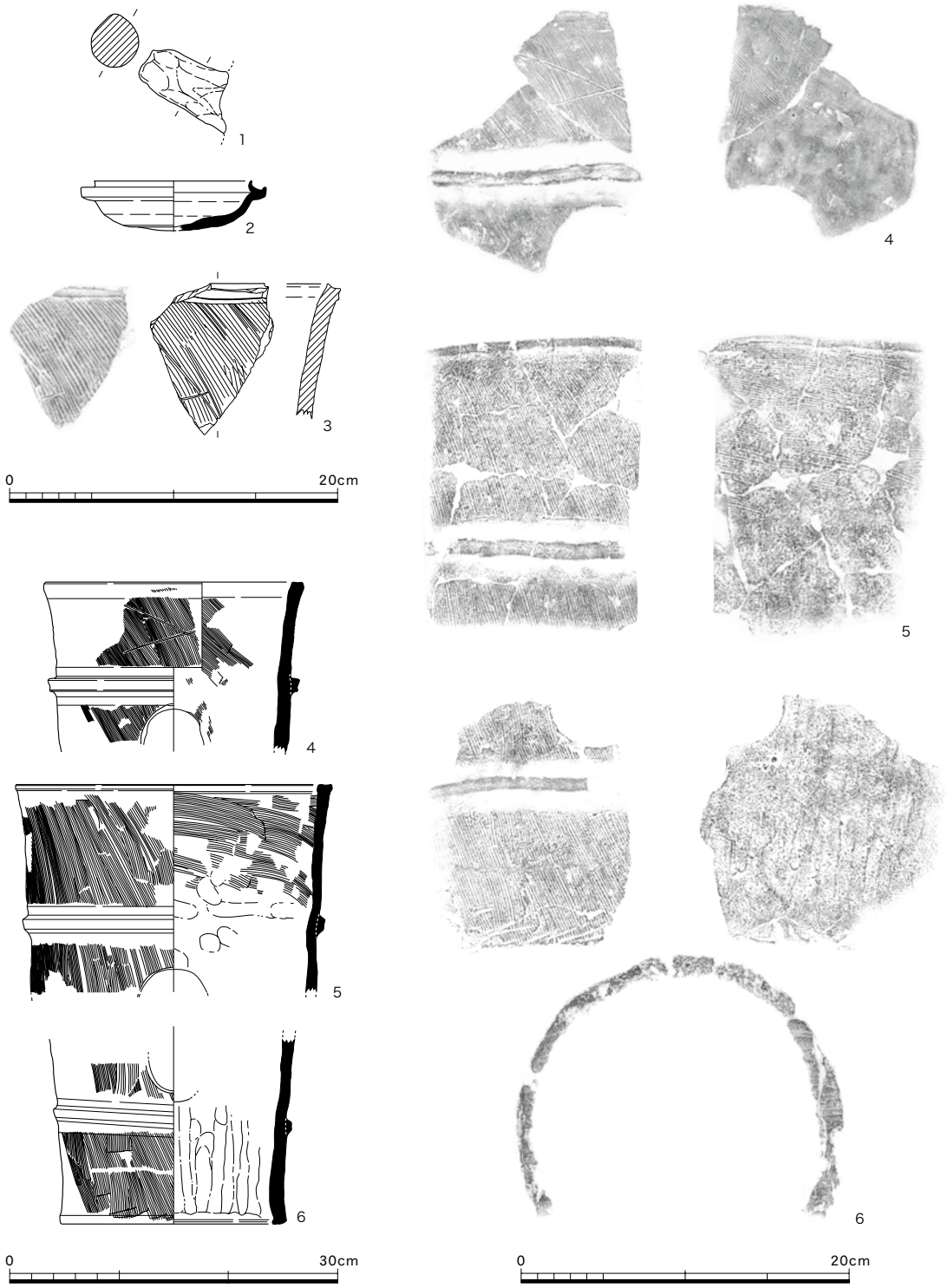
出土遺物には、近現代攪乱から出土した陶磁器や、中世遺構や包含層以後の堆積から出土した土師器・瓦器・須恵器、長岡京期の溝などから出土した土師器・須恵器、塚本古墳周壕から出土した埴輪や須恵器の他、飛鳥時代の須恵器などがある（第16図、図版６(1)～(3)）。

中世遺物　中世遺物には、土師器細片や瓦器細片、須恵器細片などがある。土師器細片のほとんどは皿と思われるが、器形の察せられるものはなかった。１は、土師器の把手部分であるが、形状は不明である。溝ＳＤ09から出土した。瓦器の細片には、椀の口縁部などがあるが、器形の分かるものは少ない。器壁が薄いことや、口縁端部内面に沈線を巡らさないことから、13～14世紀の所産と考えられる。須恵器には、鉢の破片と思われるものがある。

長岡京期の遺物　長岡京期の遺物には、土師器と須恵器などがある。いずれも細片で、器形の特定できるものは少なかった。８は、須恵器杯蓋で、後円部周壕ＳＤ37中層から埴輪片に混じって出土した。口径16.4cm前後に復原できる。7は、壺底部片で、近世溝ＳＤ13から出土した。割れ目の角が丸くとけており、耕作により土中でかなり動かされたものと考えられる。この他、主に溝ＳＤ12から出土したものであるが、出土量は非常に少なく、図化できるものや器形の特定できるものはなかった。柱穴からも細片が数点出土した。

飛鳥時代の遺物　飛鳥時代の遺物には、須恵器杯身（２）などがある。口径約13cm、器高約３cmの小型杯身で、口縁部に返りをもつ。調査区東部の現代耕作土から出土した。

古墳時代の遺物　古墳時代の遺物には、須恵器と埴輪がある。須恵器は、杯類の小片（９）で、天井部か底部と思われる。口縁部の特徴は分からないが、６世紀の所産と考えられる。後円部周壕埋土の中層から出土した。埴輪は、いずれも穴窯焼成で、硬く焼き上がっている。色調は、黄橙色系に焼き上がったもの（４～７）や灰色系のもの（３）などがある。６の基底部は、最下段の粘土を時計回り巻き込み、粘土端を外側に接合している。底面には、その接合部の痕跡を明瞭に残す。また乾燥時に置かれた台の、板圧痕も残す。外面には、タテハケを時計回りに上がりながら、タガ接合前に口縁部まで施している。ハケメ原体は、当調査で出土したものに限れば、ほぼ等間隔の細かい木目原体のもの（５・６）と、木目が次第に狭くなる原体を用いたもの（４）、やや粗い木目の原体を用いたもの（３）が見られる。底部から口縁部まで復原できたものはないが、底面から第１段タガまでの高さは約8.5cm（６）、最上段タガから口縁端部までの高さは、11.5cmあるもの（５）と、8.5cmと低いもの（４）がある。最上段の高さが高いものは、口径約29cmを測り、低いものは約23.5cmと細い。３の口縁部片は、現存で約８cmの高さがあり、下端にはタガ貼り付け後のヨコナデ調整痕がないことから、10cm前後の高さがあるものと思われる。最上段の破片には、ヘラ記号をしるしたものがある（３・４）。３には、約50°の内角をもって交わる２本の直線が見られる。これは、これまでの出土例が最も多い三角形を呈するヘラ記号と考えられる。この種のヘラ記号を記した個体は、ほとんどの場合ハケメ原体の木目が粗い特徴をもち、本例の３と共通する。また最上段タガから口縁端部までの高さが、約９～10cmのものが多く、この特徴も類似する。口縁部内面が、斜め方向の丁寧なナデである特徴も共通する。４の個体には、



第16図　出土遺物実測図（1/6・1/4）

×を呈するヘラ記号がある。このようなヘラ記号をもつこれまでの出土量は、三角形を呈するものに次ぐ出土量であり、それらは、細かい木目をもつハケメ原体で外面調整されている特徴をもつ。また最上段タガから口縁部端までの高さは約８～９㎝と低いものが多い。このような特徴は、今回出土した４とも共通点がある。口径も、これまでのものが24～26㎝であり、類似する。さらに、口縁部内面が斜め方向のハケメ調整である点も共通する。タガは、最下段のもの（６）約５㎜の高さで他の各段より低い傾向にあり、最上段のタガは約７㎜（４）と高い。しかし各段とも整った断面台形を呈し、タガ上面より下面が僅かに傾斜が緩やかな特徴をもつ。タガのヨコナデ調整も、非常に丁寧で、円筒部にまで及ぶヨコナデは、タガの上下部分とも幅約１㎝あり、タガ貼り付け前に施したタテハケを完全にナデ消し去っている。スカシ孔は、全て直径６㎝前後の円形で、穿孔箇所は、第２段部（６）と上から２段目（４・５）に見られる。図化できなかった他の埴輪を含めて、いずれも円筒埴輪で、当調査では形象埴輪の出土はなかった。3～６の出土遺構は、全て後円部周壕ＳＤ37からで、３・４が下層から、５・６は中層から出土したものである。他の小片を含めて、基底部片が中層から出土する傾向がうかがえるように思える。

４　まとめ

当調査では、①周辺部に中世集落の存在が確認できたこと、②長岡京跡の六条条間小路南側溝の位置が明らかになり、右京六条二坊六町の宅地利用の一端が明らかになったこと、③遺物からだけではあるが、飛鳥時代の遺跡が重複している可能性をうかがわせたこと、④塚本古墳後円部周壕の一部を予測通りに確認できたことなど、多くの成果を記録することができた。

まず①については、一連の当道路拡幅工事に伴う調査では、明確な遺跡の存在は見られなかったことであり、今後周辺部の調査で注意を促す成果といえる。

②については、明らかに条坊制に規制された宅地開発が行われ、宅地班給されていたことを裏付けた。しかも立地の変換箇所における宅地開発が、実施された状況を知り得た意義は大きいと言える。ただ、攪乱などにより、掘立柱建物や柵などの構造物の具体的規模が知り得なかったことは、残念である。東西落差のある地形変換箇所にあって、低い東部で六条条間小路南側溝ＳＤ12が検出されたが、地形変化の傾斜面所在箇所付近で、その側溝が突然途切れていた事実は、どのように解すべきか、問題を持ち越すことになった。この溝の西延長上の一段高い当調査区東部では、攪乱後ＳＫ08があり、削平を受けて検出できなかった可能性がある。さらに西へ延長させた線上には、長岡京跡右京第972次調査第３トレンチ検出の溝ＳＤ43があるが、その間約17ｍが途絶えている。この間が少し高まりをもつ地形であったと考える見方もある。いずれにしろ、現在のように大きく北に迂回するような例外的宅地開発はなかったと見るべきであろう。またこの側溝に南面する右京六条二坊六町の宅地内には、塚本古墳が所在しているが、後円部周壕を埋めて更地に造成してから、掘立柱建物が配置されている。さらに、この建物の捉え方にも左右されるが、少なくとも後円部の一部が削られ、宅地化されていた可能性がある。長岡京期の条坊制施行開発に伴い、どの程度古墳が壊されて宅地化されたか、また古墳所在箇所と宅地被班給者の階

位や用途と、古墳破壊の度合いとに関係があるのか、興味深い。長岡京期に破壊されずに残存した古墳には、５世紀中葉の恵解山古墳をはじめ、６世紀の神足古墳や、七つ塚古墳群、井ノ内稲荷塚古墳などがあり、いくらか手の加わった古墳には、今里車塚古墳のように、墳丘が完全に破壊されなかったものなどもある。当塚本古墳の場合、かなり削平を受けた可能性はあるが、地名に塚の名称が採用されていることから、今里車塚古墳のように、墳丘を残す必要最小限の整地にとどめた宅地開発であったのか、ほぼ壊滅状態ではあるが、僅かな高まりとして残ったのか、いろいろな見方ができる。いずれにしろ、塚本古墳所在地が、条坊制の宅地内に取り込まれていたとする見方は、事実として認められよう。

③については、周辺部の調査でも、明確な遺跡の存在は知られていなかった。須恵器杯身１点が出土した事実からは、具体的に遺跡の性格を類推できないが、開田古墳群内に７世紀の土壙墓が検出されている点から、墓域の一角であった可能性は考えられる。

④の塚本古墳に関しては、後円部周壕が、予想位置から予想規模で検出できたことにより、積み重ねられてきた復原案の正しさを裏付けた。また出土埴輪の整理結果においても、かつての分析成果の正しさを裏付けることとなった。当調査は、塚本古墳に関わる発掘調査としては、最後になるかも知れない。そこで、今回は、今まであまり触れられなかった立地と古墳構築の関係について先述した。結果とした、地形環境に即しながらも、後背低地の広がりを眺望できる絶好の場所に占地されているとの見方をまとめた。

以上のように、激しい攪乱を受けながらも、遺物出土量は少量であったとは言え、多彩な成果をあげることができた。特に、長岡京期の宅地開発のあり方や、それに絡んだ古墳との関係について、興味深く観察することができた。長岡京内に所在した古墳との関係が、他所でも検討され、比較される好材料と言えよう。　（岩崎　誠）

（参考文献）
１）木村泰彦他「長岡京跡右京第106次調査概要」『長岡京市センター報告書』第１集　1984年
２）木村泰彦「右京第173次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和59年度　1985年
３）吉田野乃他「長岡京跡右京第266次調査概要」『京都府遺跡調査概報』第27冊　1988年
４）木村泰彦「長岡京跡右京第951次調査概要」『長岡京市センター報告書』第52集　2010年
５）原　秀樹他「長岡京跡右京第972次調査概要」『長岡京市センター報告書』第53集　2010年

５　付　編　―塚本古墳周濠出土遺物―

はじめに

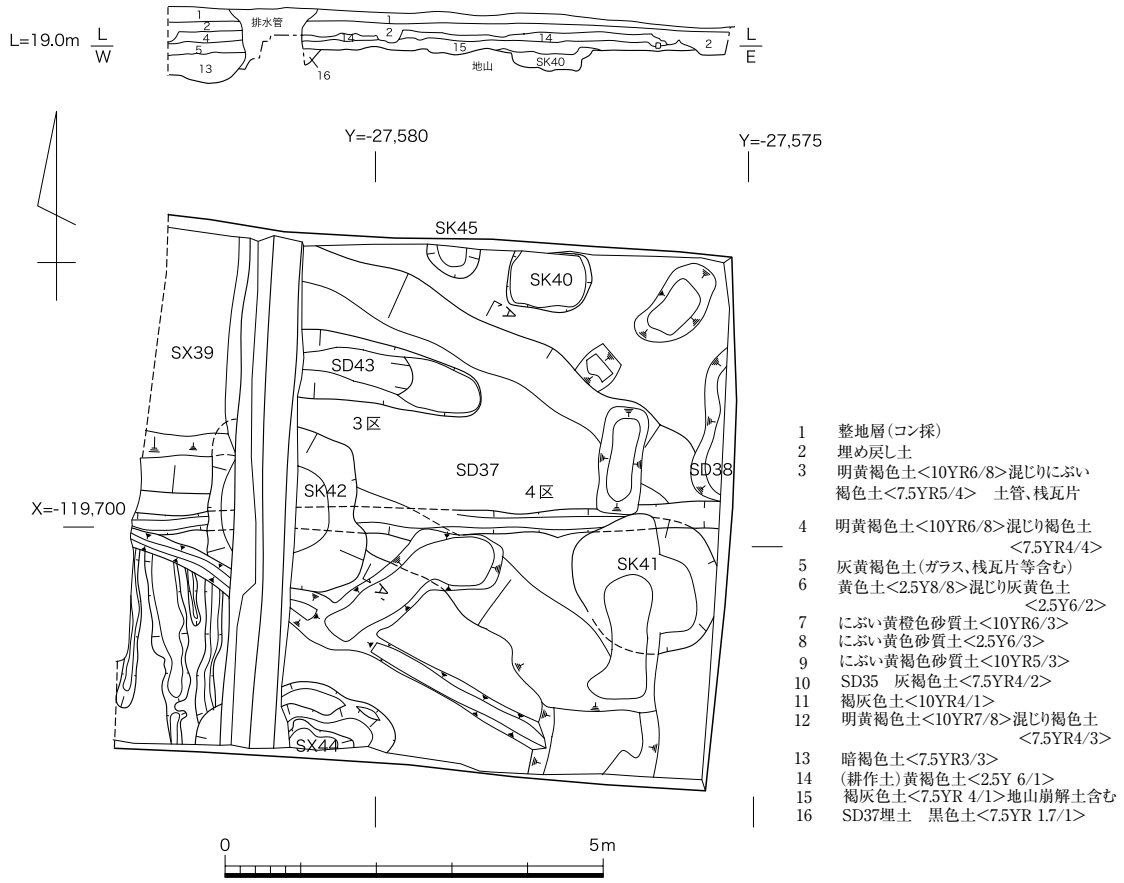
右京第972次調査で調査した塚本古墳の後円部周濠（SD37）は、長岡京市埋蔵文化財報告書第53集（平成22年3月）の中で報告しているが、整理途中での執筆であったため、遺物は概要報告にとどまっていた。そこで本編で第53集未収録遺物を報告する。第53集などとあわせて活用されたい。

塚本古墳の周濠からは埴輪とともに長岡京期の遺物が大量に出土している。これらの資料は、古墳の内容と同時に長岡京造営の実体を解明するための重要な資料である。幸いに調査区での周濠は一部攪乱をうけていたものの深さ60㎝ほどで残存しており、埋没の経過等を確認することができた。なお遺物取り上げ層位と断面図層位との関係は、上層が１層、中層が２層、下層および最下層が３層におおむね対応する。セクション内遺物は分層毎に取り上げている。４層から遺物は出土していない。

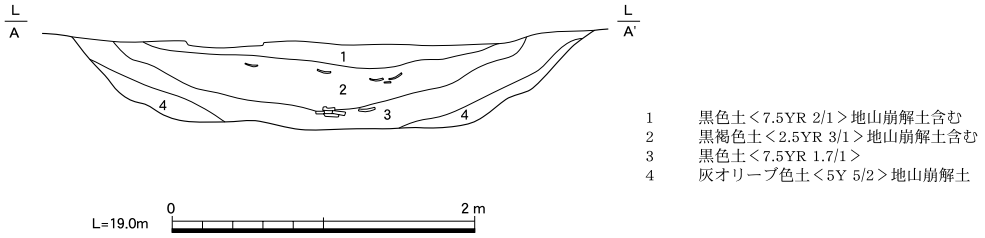
長岡京期の遺物は３層まで確認できることから、４層を除くほぼ周濠の埋土全体が長岡京期に埋められた土であるといえる。このことは各層が墳丘側に偏ることなく、レンズ状に堆積していることと併せて人為的に埋められていることを物語っている。

長岡京期の遺物

３区２層から集中して出土した。特に21の須恵器甕はほぼ１個体分の破片が折り重なって出土



第17図　３トレンチ部分図（1/100）



第18図 溝SD43断面図（1／50）

している。３区では４区と比較して２層の厚さが周壕底近くまで堆積していた。

土師器では皿Ａ、皿Ｃが出土している。皿Ａでは内面に線刻されているもの（３、８、９）や墨書されたもの（７）がある。他に高杯（10、11）、甕（13、14）、土馬（12）が出土している。

須恵器では杯Ａ（15）、杯Ｂ（16）、皿Ａ（17）、壺Ｈ（18）がある。大型の甕（21）は全体に自然柚がかかり、底部外面には木葉痕が認められる。土器以外では刀子（20）が出土している。

古墳時代の遺物

古墳に伴う土器は、須恵器器台（19）が一片出土しているのみである。

埴輪は１～３層で出土しており、各層間での接合が認められる。ほとんどは普通円筒埴輪であり、口縁部から底部まで接合するものも複数あった。埴輪は全て窖窯焼成で、軟質なものから堅く焼き締まったものまでさまざまである。中には焼き歪んだものも多い。

円筒埴輪では、口縁部下にヘラ記号が描かれたものも９点ほど出土した。記号は「△」が４点（22、25、29、57）、「⌔」が２点（24、56）、「―」が２点（33、34）、「⊃」（31）が１点である。

形象埴輪では、石見型盾形埴輪が67とその底部になると考えられる64～66がある。他に蓋形（58）、朝顔形（59、60）などが出土している。

まとめ

これまでの塚本古墳に関する調査で問題となっているのは周壕が埋没する契機と時期である。ここではこの点に関して若干の考察をしておきたい。

これまでの調査でも判明しているように、周壕の埋土からは長岡京期の遺物が出土しており、長岡京造営に伴って墳丘が崩され、周壕が埋め立てられたと理解されている。基本的には誤りではないと思われるが、細部を検証すると次のような問題点が浮かび上がってくる。

一点目は古墳築造から長岡京期までの自然堆積層と考えられる層が断面図４層しか見いだせない点である。ある段階で周壕がさらえられたと見ることはできないだろうか。

もう一点は埋土の中に含まれる長岡京期の遺物が多すぎる点である。中でも大型の須恵器甕がほぼ１個体、他の完形になる須恵器杯や多くの土師器片とともに出土している様子からは、塵芥処理的な要素も想起され、そこからは遷都間もない頃とは考えにくい。

京内の古墳がどのように扱われたのかという問題は、現在に残されている他の古墳全てに共通する問題である。墳丘を崩す行為は単なる条坊施工のためだけでなく、周辺一帯の開発に伴うものと考えられることから、個々の古墳について、その開発の内容と時期を検討する必要があろう。

（小田桐 淳）

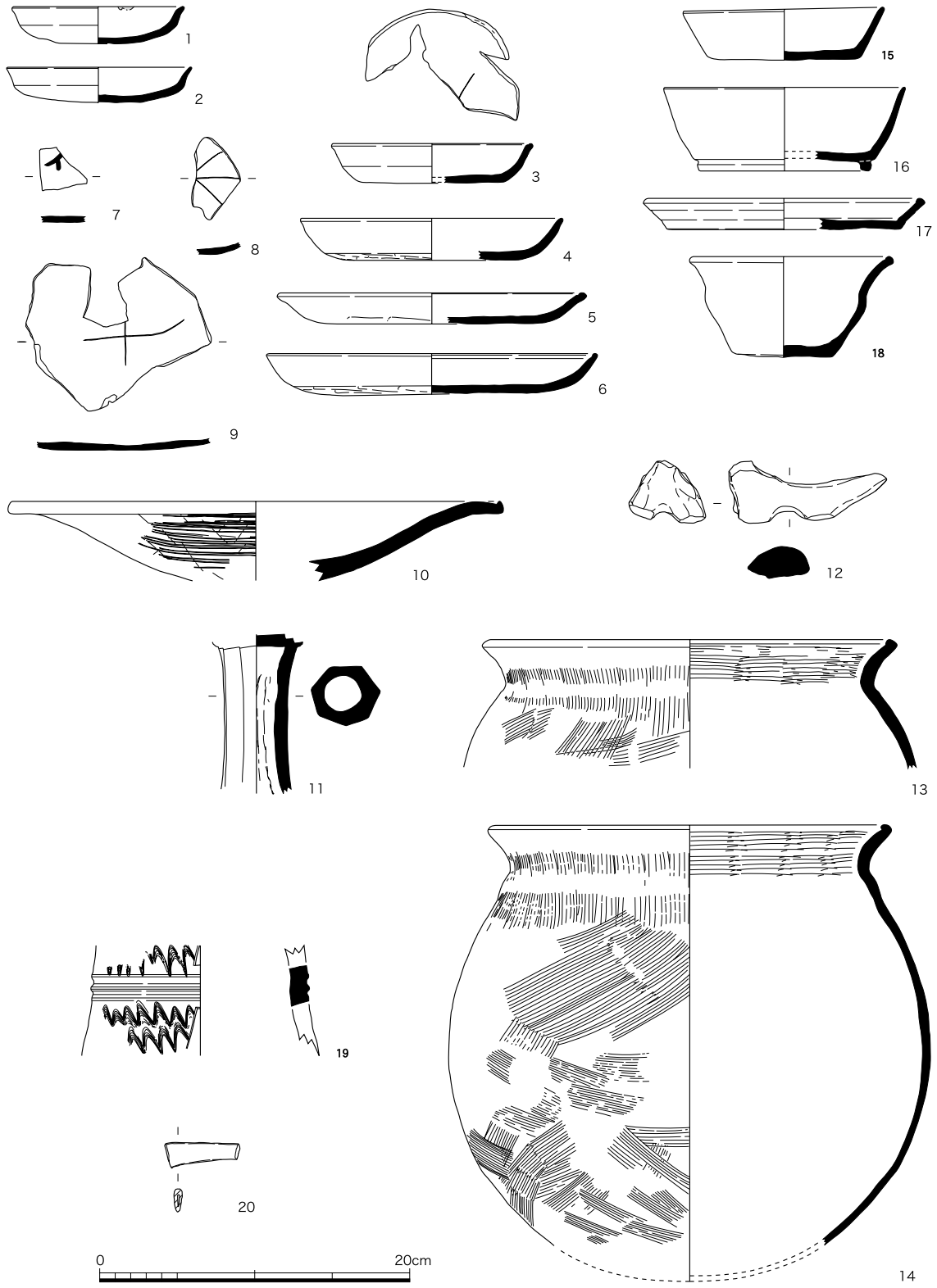
付表－1　出土遺物観察表

種類	器形	番号	法量 器高(長)	法量 口径(幅)	法量 底径(厚)	色調	調整	出土遺構・層位・地区	備考
土師器	皿	3	(2.3)cm	11.95cm	――cm	橙 5YR6/6	口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	3トレンチ　SD37　3区 埋土下層　091208	
	杯A	4	3.75cm	12.6cm	――cm	橙 5YR7/6	外面ケズリ	3トレンチ　SD37　3区 埋土上層　091208	C手法
	甕	5	14.85cm	17.0cm	――cm	橙 5YR7/6	体部ハケメ／内面口縁部～頸部ヨコ方向のハケ、体部ナデ、ユビオサエ	3トレンチ　SD37　3区 埋土下層　091208	外面にスス付着
	甕	6	(27.1)cm	26.0cm	――cm	明黄褐 10YR7/6	頸部タテハケ、体部ハケメ／内面口縁部ヨコハケ	3トレンチ　SD37 3区　埋土下層　091208	
	皿	8	(2.7)cm	21.3cm	――cm	橙 5YR6/8	体部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	3トレンチ　SD37 3区　埋土上層　091208	
	皿	9	(2.95)cm	16.6cm	――cm	橙 7.5YR7/6	外面ケズリ	3トレンチ　SD37　3区 埋土上層　091208	C手法
	皿	10	2.55cm	13.0cm	――cm	橙 5YR6/6	体部上端ヨコナデ、底部下端ケズリ	3トレンチ　SD37　3区 埋土上層　091208	内面に線刻あり
	皿	11	2.5cm	17.2cm	――cm	橙 5YR6/6	口縁部ヨコナデ、体部～底部ケズリ	3トレンチ　SD37　3区 埋土上層　091208	C'手法
	皿	12	(2.65)cm	16.4cm	――cm	橙 2.5YR6/8	口縁部ヨコナデ、体部～底部ケズリ	3トレンチ　SD37　3区 埋土上層　091208	C手法　内面に線刻あり
	皿	13	2.7cm	17.0cm	――cm	橙 7.5YR6/6	体部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	3トレンチ　SD37　3区 埋土上層　091208	
	皿	14	(11.95)cm	(9.8)cm	0.5cm	橙 7.5YR6/6	ケズリ	3トレンチ　SD37　3区 埋土上層　091208	内面に線刻あり
	皿	15	(3.1)cm	(5.3)cm	0.4cm	橙 5YR6/6	ナデのちミガキ	3トレンチ　SD37 3区　埋土上層　091208	内面に線刻あり
	皿	21	(2.5)cm	16.4cm	――cm	橙 7.5YR6/6	口縁部～体部上端ヨコナデ、体部下端ケズリ、底部ナデのみミガキ	3トレンチ　SD37　3区 上層　091207	
	皿	22	2.4cm	11.1cm	――cm	にぶい黄橙 10YR7/4	体部上端ヨコナデ、底部下端～底部ナデ	3トレンチ　SD37　4区 埋土上層　091208	口縁部に油煙あり
	皿	24	(3.0)cm	12.2cm	――cm	橙 7.5YR7/6	口縁部～体部上端ヨコナデ、体部下端～底部ユビオサエのちミガキ	3トレンチ　4区　SD37 埋土下層／3区　埋土下層	
	椀A	25	(3.2)cm	12.1cm	――cm	橙 7.5YR6/6	外面ケズリ	3トレンチ　SD43　埋土 091202/SD37　4区　セクション　1層　091216	C手法
	椀A	27	(2.9)cm	15.0cm	――cm	橙 5YR6/6	外面ケズリ	3トレンチ　SD43　埋土 091202	
	椀A	26	3.2cm	13.0cm	――cm	にぶい橙 5YR6/4	口縁部ヨコナデ、体部～底部ケズリ	3トレンチ　SD43　埋土 091202	C'手法
	皿	29	2.05cm	10.2cm	――cm	橙 7.5YR6/6	体部ヨコナデ、底部ナデ	3トレンチ　SX39　埋土 091202	
	壺E	30	(4.1)cm	8.6cm	――cm	橙 5YR6/6	口縁部ヨコナデ、体部ミガキ	3トレンチ　SX39　埋土 091202	
	皿？	38	(2.8)cm	(3.05)cm	0.4cm	橙 7.5YR6/6	ナデ	3トレンチ　SD37　1区　最下層　091217	内面に墨書
	盤	39	(5.1)cm	32.0cm	――cm	橙7.5YR6/6	口縁部ヨコナデ、体部ケズリのちミガキ	3トレンチ　SD37　1区　最下層　091217	
	高杯	41	(10.3)cm	――cm	――cm	橙 5YR6/6	脚注部ヘラケズリ	3トレンチ　SD37　4区　セクション　1層 091217	脚注部内面にしぼり痕あり
	甕	42	(7.45)cm	26.8cm	――cm	橙 5YR7/8	頸部タテ方向のハケ、体部ナデのちハケメ／内面口縁部ヨコ方向のハケ	3トレンチ　SD37　4区　セクション　2層　091217	
	皿	43	(2.0)cm	20.0cm	――cm	にぶい橙 7.5YR6/4	底部ケズリ、体部ヨコナデ	3トレンチ　SD37　4区　セクション　2層　091217	
	皿	46	(3.1)cm	15.8cm	――cm	橙7.5YR6/6	口縁部ヨコナデ、体部～底部ケズリ	3トレンチ　灰褐色土 091022	

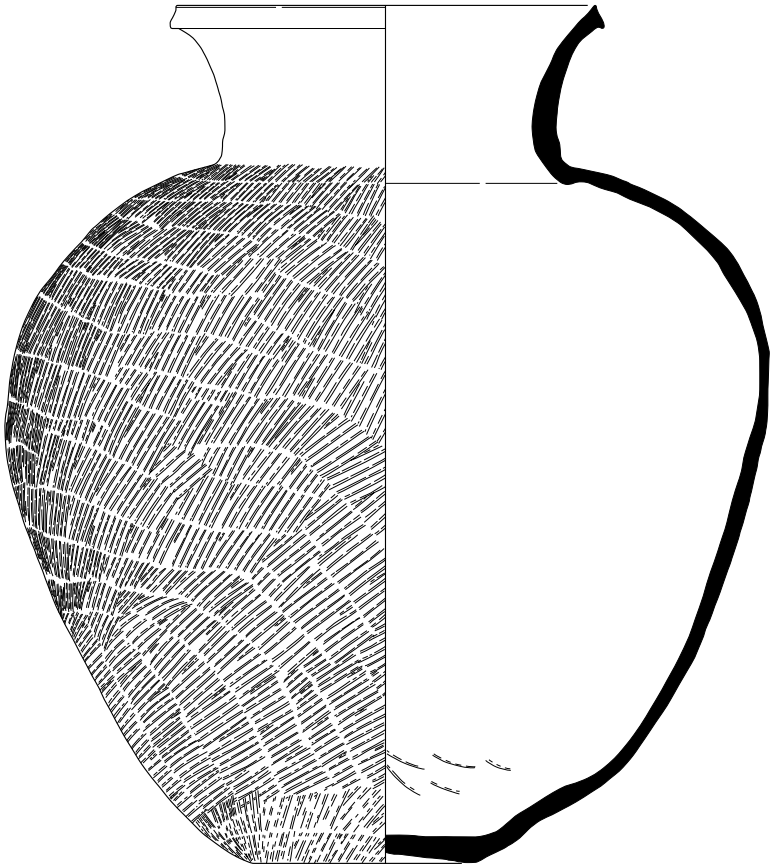
種類	器形	番号	法量 器高(長)	法量 口径(幅)	法量 底径(厚)	色調	調整	出土遺構・層位・地区	備考
土師器	カマコ	48	(4.0)cm	6.85cm	――cm	浅黄橙 10YR8/4	外面ナデ	3トレンチ　SD04　掘り下げ　091021	
	皿	49	1.3cm	8.0cm	――cm	浅黄橙 7.5YR8/3	口縁部ヨコナデ、体部未調整	3トレンチ　SD04　掘り下げ　091021	内面1/2と口縁部外面に油煙あり
	皿	50	1.25cm	7.95cm	――cm	灰白 10YR8/2	口縁部ヨコナデ、体部未調整	3トレンチ　SD04　掘り下げ　091021	口縁部内外面に油煙あり
	皿	51	1.1cm	7.8cm	――cm	浅黄橙 7.5YR8/3	口縁部ヨコナデ、体部未調整	3トレンチ　SD04　掘り下げ　091021	
須恵器	杯A	1	3.6cm	11.2cm	7.2cm	黄灰 2.5Y6/1		3トレンチ　SD37　3区 埋土下層　091208	外面に火だすき痕あり
	杯B	2	5.15cm	18.0cm	13.0cm	灰白 N7/0		3トレンチ　SD37　3区 埋土下層　091208	
	壺	7	(7.5)cm	――cm	4.2cm	灰 N6/0	体部下端ナデ	3トレンチ　あげ土 091221	外面に自然釉付着
	杯A	18	3.0cm	15.6cm	――cm	にぶい黄橙 10YR7/2		3トレンチ　SD37　3区 埋土上層　091208	外面に重ね焼きの痕跡
	杯B	19	5.15cm	16.1cm	11.4cm	灰 N6/0	底部ロクロナデ	3トレンチ　SD37　3区 埋土上層　091208	
	蓋	20	1.4cm	17.6cm	――cm	灰白 N7/0		3トレンチ　SD37　3区 埋土上層	
	杯B	28	(1.65)cm	10.9cm	――cm	灰 5Y6/1		3トレンチ　SD43　埋土 091202	
	杯B	31	4.1cm	13.0cm	9.05cm	灰 N6/0		3トレンチ　SX39　埋土 091202	底部に爪圧痕あり
	杯B	32	5.05cm	16.3cm	12.2cm	灰 N6/0		3トレンチ　SX39　埋土 091202	線刻あり
	杯A	33	3.6cm	12.2cm	――cm	灰 N6/0		3トレンチ　SX39　埋土 091202	
	壺	34	(10.5)cm	――cm	6.8cm	灰 N6/0	体部下端に回転ヘラケズリ	3トレンチ　SX39　埋土 091202	底部に糸切り痕あり
	甕	35	45.4cm	22.2cm	11.7cm	黄灰 2.5Y6/1	体部全面タタキ／内面体部下端に同心円あて具痕	3トレンチ　SD37　3区　2層　091216	底部に木の葉痕あり／内面底部～体部下端に自然釉付着
	杯B	36	5.4cm	15.5cm	11.0cm	灰 5Y6/1		3トレンチ　SD37　1区　最下層　091217	
	皿	37	2.0cm	18.2cm	15.1cm	灰 N6/0		3トレンチ　SD37　1区　最下層　091217	
	器台	40	(7.1)cm	――cm	――cm	灰 5Y6/1	体部ハケメ	3トレンチ　SD37　4区 埋土上層～下層　091208	上段：穿孔2カ所残存（推定4カ所）、下段：穿孔1カ所残存
	杯A	44	(3.45)cm	13.0cm	――cm	灰白 2.5Y8/2	体部ヨコナデ	3トレンチ　SD37　4区 セクション　2層　091217	
	壺H	45	(6.5)cm	13.0cm	――cm	灰白 2.5Y8/2	磨滅のため調整不明瞭	3トレンチ　SD37　4区　セクション　2層　091217	
	壺M	47	(3.15)cm	4.9cm	――cm	灰 N4/0		3トレンチ　上面精査 091016	
土製品	製塩土器	16	(4.0)cm	12.4cm	――cm				
	土馬	23	(4.0)cm	(10.2)cm	1.6cm				
	製塩土器	52	(15.0)cm	18.2cm	――cm				
鉄製品	刃子	17	(4.9)cm	(1.7)cm	5.5cm				
埴輪	円筒	53集 83	54.7cm	28.5cm	18.4cm	にぶい褐色〈7.5YR5/3〉	基本調整　底面不調整	SD37 3区 セクション　3層	硬質　底部に粘土巻き上げ痕
	円筒	53集 84	(44.1)cm	25.7cm	――cm	橙色〈7.5YR7/6〉	基本調整	SD37 3区 最下層	硬質　口縁部外面に線刻

種類	器形	番号	法量 器高(長)	法量 口径(幅)	法量 底径(厚)	色調	調整	出土遺構・層位・地区	備考
埴輪	円筒	53集85	(41.5)cm	——cm	16.2cm	にぶい黄橙色〈10YR6/3〉	基本調整　底部外面に板ナデ、底面不調整	SD37 4区 上層～下層	硬質　体部内面に爪圧痕、底部に粘土巻き上げ痕
	円筒	54集23	53.8cm	25.8cm	19.4cm	にぶい黄橙色〈10YR5/3〉	基本調整　底部外面に横方向の板ナデ、底面不調整	SD37 3区 最下層	硬質
	円筒	54集31	(31.5)cm	24.0cm	——cm	橙色〈7.5YR7/6〉	基本調整	SD37 3区 最下層	軟質　口縁部外面に線刻
	円筒	54集22	(55.6)cm	24.4cm	——cm	橙色〈5YR6/6〉	基本調整　底部外面に板ナデ、口縁部内面に横方向のハケメ、底面不調整	SD37 4区 セクション　3層	硬質　口縁部外面に線刻、体部内面に爪圧痕、底部外面に板圧痕、底部に粘土巻き上げ痕
	円筒	54集25	(42.2)cm	23.6cm	——cm	橙色〈5YR6/7〉	基本調整　口縁部内面に横方向のナデおよびハケメ	SD37 4区 セクション　3層	軟質
	円筒	54集27	(47.3)cm	24.9cm	——cm	橙色〈5YR6/8〉	基本調整　底部内面に横方向のヘラケズリ	SD37 4区 最下層	硬質
	円筒	54集26	(27.7)cm	——cm	20.8cm	浅黄色〈2.5Y7/4〉	基本調整　体部外面の一部に横方向のハケメ	SD37 4区 下層	軟質
	円筒	54集49	(20.3)cm	——cm	17.4cm	橙色〈5YR7/6〉	基本調整　底面不調整	SD37 4区 上層	軟質
	円筒	54集34	(21.2)cm	27.2cm	——cm	橙色〈5YR6/6〉	基本調整　口縁部内面に横方向および左傾する横方向のハケメ	SD37 3区 最下層	軟質　口縁部外面に線刻
	円筒	54集53	(13.4)cm	——cm	17.3cm	黄橙色〈10YR8/6〉	基本調整　底部外面に板ナデ	SD37 4区 上層～下層	軟質
	円筒	54集38	(20.0)cm	——cm	15.6cm	褐灰色〈10YR5/1〉	基本調整　底部外面に板ナデ、底面にハケメ	SD37 4区 上層～下層	軟質　底部に粘土巻き上げ痕
	円筒	54集29	(17.6)cm	20.4cm	——cm	黄灰色〈2.5Y6/1〉	基本調整	SD37 3区 最下層	硬質　口縁部外面に線刻
	円筒	54集33	(20.0)cm	23.0cm	——cm	橙色〈7.5YR7/6〉	基本調整　口縁部内面に左傾する横方向のハケメ	SD37 3区 最下層	軟質　口縁部外面に線刻
	円筒	54集43	(13.3)cm	——cm	19.0cm	浅黄橙色〈10YR8/4〉	基本調整　底部外面に板ナデのちナデ、底面不調整	SD37 4区 上層	軟質
	円筒	54集51	(11.2)cm	——cm	18.0cm	にぶい黄橙色〈10YR6/3〉	基本調整　底部外面にナデ、底部内面に横方向のヘラケズリ、底面不調整	SD37 3区 最下層	軟質
	円筒	54集28	(15.2)cm	20.3cm	——cm	橙色〈5YR7/6〉	基本調整　口縁部内面に左傾する横方向のハケメ	SD37 3区 最下層	軟質
	円筒	54集50	(7.2)cm	——cm	14.3cm	にぶい黄橙色〈10YR7/4〉	基本調整　底部内面に横方向のヘラケズリ、底面不調整	SD37 4区 セクション　1層	軟質
	円筒	54集32	(12.7)cm	24.3cm	——cm	灰黄褐色〈10YR6/2〉	基本調整	SD37 3区 最下層	軟質
	形象	54集63	(5.3)cm	(10.4)cm	——cm	橙色〈7.5YR7/6〉		SD37 4区 下層	軟質　線刻
	形象	54集62	(4.2)cm	(8.2)cm	1.4cm	橙色〈5YR7/6〉	内外面ナデ	SX39	軟質　線刻
	形象 石見型盾形	54集67	(86.6)cm	(40.9)cm	1.6cm	にぶい橙色〈7.5YR6/4〉	基本調整　上ヒレ接続部の体部内面に横方向のナデ、内面下段に縦方向のハケメ、ヒレ表裏指ナデ	SD37 4区 最下層	硬質　線刻
	形象 朝顔形	54集60	(13.8)cm	——cm	——cm	橙色〈5YR6/6〉	基本調整　体部外面に左傾するナデ、頚部内面に横方向のナデ、体部内面に縦方向および左傾する縦方向のハケメ	SD04 2区	軟質
	形象 朝顔形	54集58	(6.1)cm	38.2cm	——cm	橙色〈7.5YR6/6〉	外面に縦方向のハケメ、内面に横方向のハケメおよびナデ	SD37 2区 最下層	軟質
	形象 蓋形	54集59	(4.1)cm	——cm	——cm	黄橙色〈10YR8/6〉	外面に縦方向のハケメ、内面にナデ	SD37 1区 最下層	硬質

種類	器形	番号	法量 器高(長)	法量 口径(幅)	法量 底径(厚)	色調	調整	出土遺構・層位・地区	備考
	形象 蓋形	54集61	(9.6)cm	——cm	——cm	黄橙色〈10YR8/6〉	外面にナデ、内面にナデおよびユビオサエ	SD37 1区 最下層	硬質　外面に線刻
埴輪	円筒	54集36	(24.4)cm	25.5cm	——cm	褐灰色〈10YR5/1〉	基本調整（右傾）口縁部内面に横方向および右傾する横方向のハケメ、	SD04 2区	硬質　左利きか
	円筒	54集24	44.95cm	21.9cm	19.8cm	黄灰色〈2.5Y5/1〉	基本調整（内面ナデ一部は右傾）底部外面に板オサエ、口縁部内面に横方向のハケメ、体部上段内面に左傾する縦方向のハケメ、底部内面に横方向のナデ、底面不調整	SD37 1区 最下層	硬質　口縁部外面に線刻
	円筒	54集37	(39.0)cm	28.4cm	——cm	灰色〈5Y5/1〉	基本調整　口縁部内面に横方向のハケメ	SD37 2区 最下層	硬質
	円筒	54集66	(24.0)cm	——cm	19.7cm	橙色〈7.5YR7/6〉	基本調整　底部外面にユビオサエ、底面不調整	SD37 2区 最下層　一括	硬質
	円筒	54集47	(17.8)cm	——cm	16.5cm	にぶい褐色〈7.5YR5/4〉	基本調整　底部外面に板オサエ、底面不調整	SD37 1区 最下層	硬質　底部に粘土巻き上げ痕
	円筒	54集55	(32.3)cm	——cm	18.7cm	浅黄橙色〈7.5YR8/4〉	基本調整　底部外面に板オサエ、体部内面に縦方向のハケメ	SD37 2区 最下層　一括	硬質　底部に粘土巻き上げ痕
	円筒	54集30	(17.3)cm	26.0cm	——cm	橙色〈7.5YR7/6〉	基本調整（右傾）口縁部内面に横方向のハケメのちユビオサエ	SD37 2区 最下層　一括	軟質　左利きか
	円筒	54集54	(25.0)cm	——cm	17.1cm	灰黄褐色〈10YR5/2〉	基本調整（右傾）底部外面板ナデのちナデ、底面不調整	SX39	硬質　左利きか
	円筒	54集41	(9.7)cm	——cm	18.4cm	暗灰黄色〈2.5Y5/2〉	基本調整　底部外面板ナデ、底面不調整	SD37 1区 最下層	硬質
	形象	54集64	(8.0)cm	(8.1)cm	——cm	にぶい橙色〈7.5YR7/4〉	基本調整　底部外面板ナデ	SX39	軟質
	形象	54集65	(8.8)cm	(8.9)cm	——cm	橙色〈7.5YR7/6〉	基本調整　底部外面ナデ	SX39	軟質
	円筒	54集35	(16.7)cm	29.8cm	——cm	にぶい黄褐色〈10YR5/3〉	基本調整　口縁部内面に左傾する横方向のハケメのち横方向のナデ	SD37 1区 最下層	硬質
	円筒	54集45	(12.8)cm	——cm	14.8cm	にぶい黄褐色〈10YR5/3〉	基本調整　底部外面ナデ、体部内面に縦方向のハケメ、底面不調整	SD37 1区 最下層	硬質
	円筒	54集44	(10.0)cm	——cm	18.7cm	にぶい黄橙色〈10YR6/3〉	基本調整（体部内面のナデは横方向）底部外面に板ナデ、底面不調整	SX39	硬質　底部に粘土巻き上げ痕、底面にワラ圧痕か
	円筒	54集40	(15.0)cm	——cm	16.2cm	にぶい橙色〈7.5YR6/4〉	基本調整（体部内面の一部は横方向のナデ）底面不調整	SX39	硬質
	円筒	54集52	(13.2)cm	16.5cm	——cm	浅黄橙色〈10YR8/4〉	基本調整　体部内面に縦方向のハケメ、底面不調整	SX39	軟質　底部に粘土巻き上げ痕
	円筒	54集39	(13.0)cm	——cm	15.5cm	橙色〈5YR7/6〉	基本調整　底部外面にユビオサエ、底面不調整	SX39	軟質　底部に粘土巻き上げ痕
	円筒	54集42	(14.1)cm	——cm	18.6cm	にぶい橙色〈7.5YR7/4〉	基本調整　底面不調整	SX39	硬質　底部に粘土巻き上げ痕
	円筒	54集46	(10.3)cm	——cm	16.7cm	橙色〈7.5YR7/6〉	基本調整　底部外面にユビオサエ、およびナデ、底面不調整	SX39	軟質　底部に粘土巻き上げ痕
	円筒	54集48	(13.9)cm	22.4cm	——cm	にぶい黄橙色〈10YR7/4〉	基本調整　底部内面一部に横方向のケズリ	SX39	軟質
	円筒	54集56	(8.9)cm	——cm	——cm	にぶい黄橙色〈10YR6/3〉	内外面に縦方向のハケメ	SD04 3区	硬質　外面に線刻あり
	円筒	54集57	(7.2)cm	——cm	——cm	にぶい黄橙色〈10YR7/3〉	基本調整	SD37 3区 最下層	軟質　外面に線刻あり



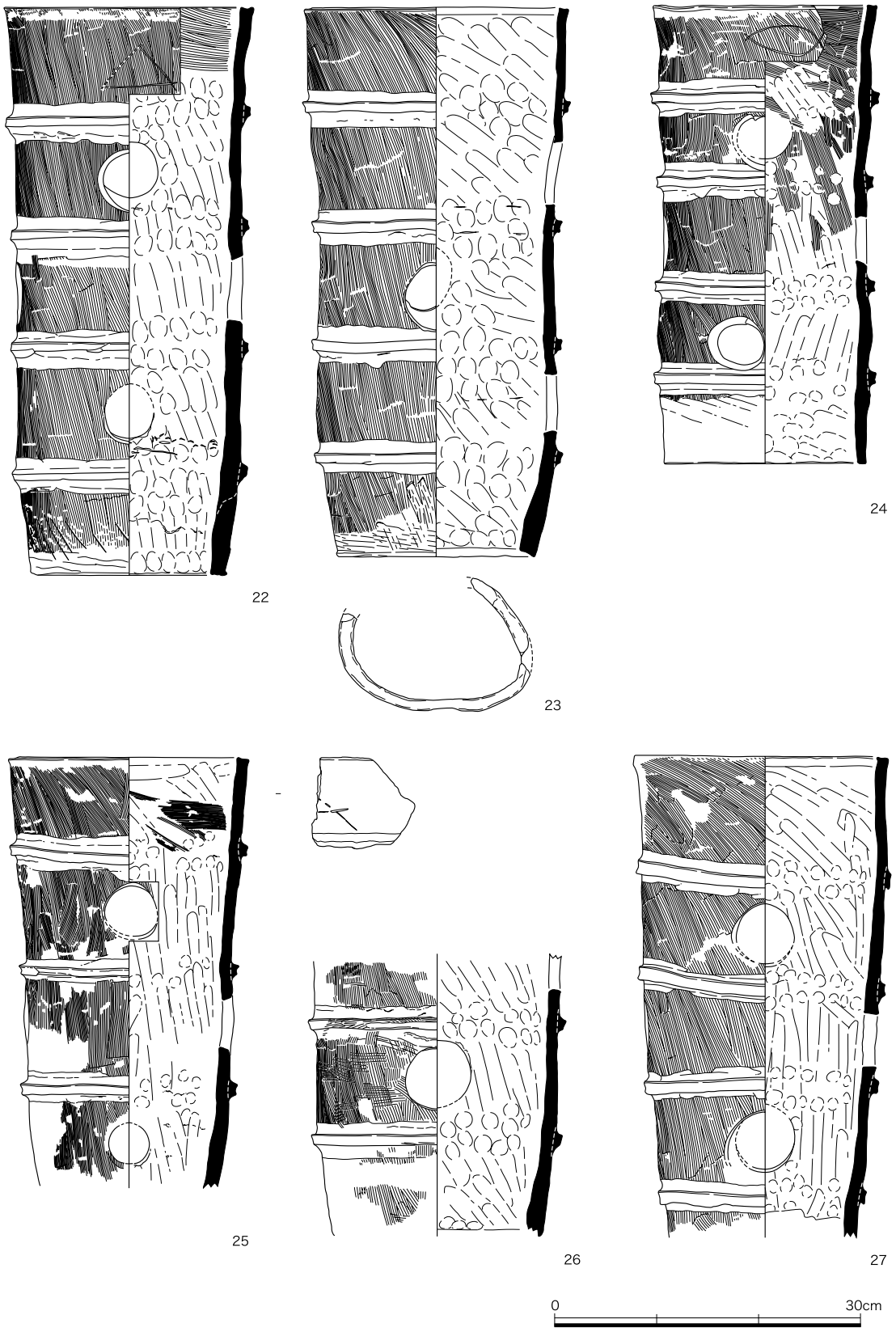
第19図　遺物実測図－１（1/4）



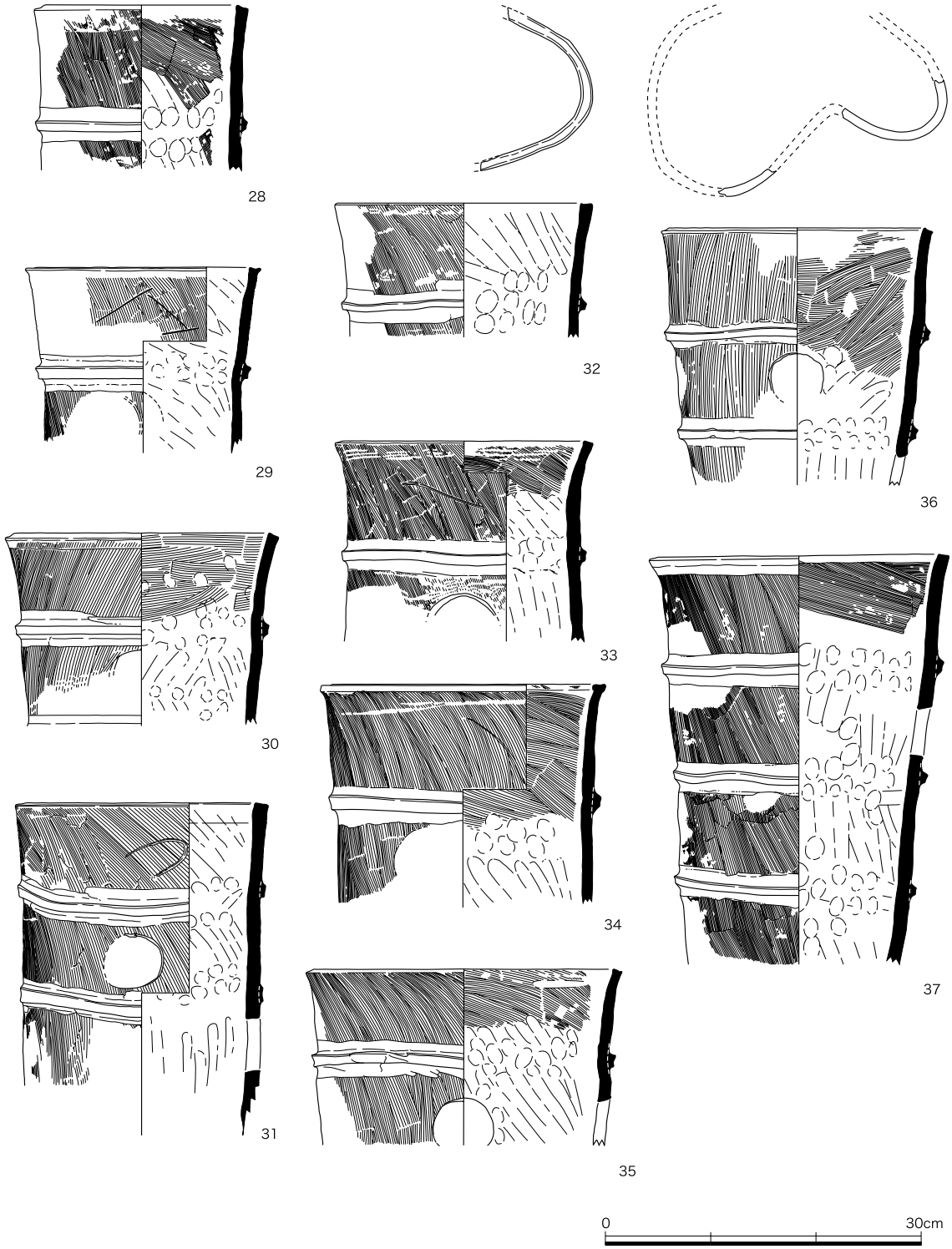
21

0 20cm

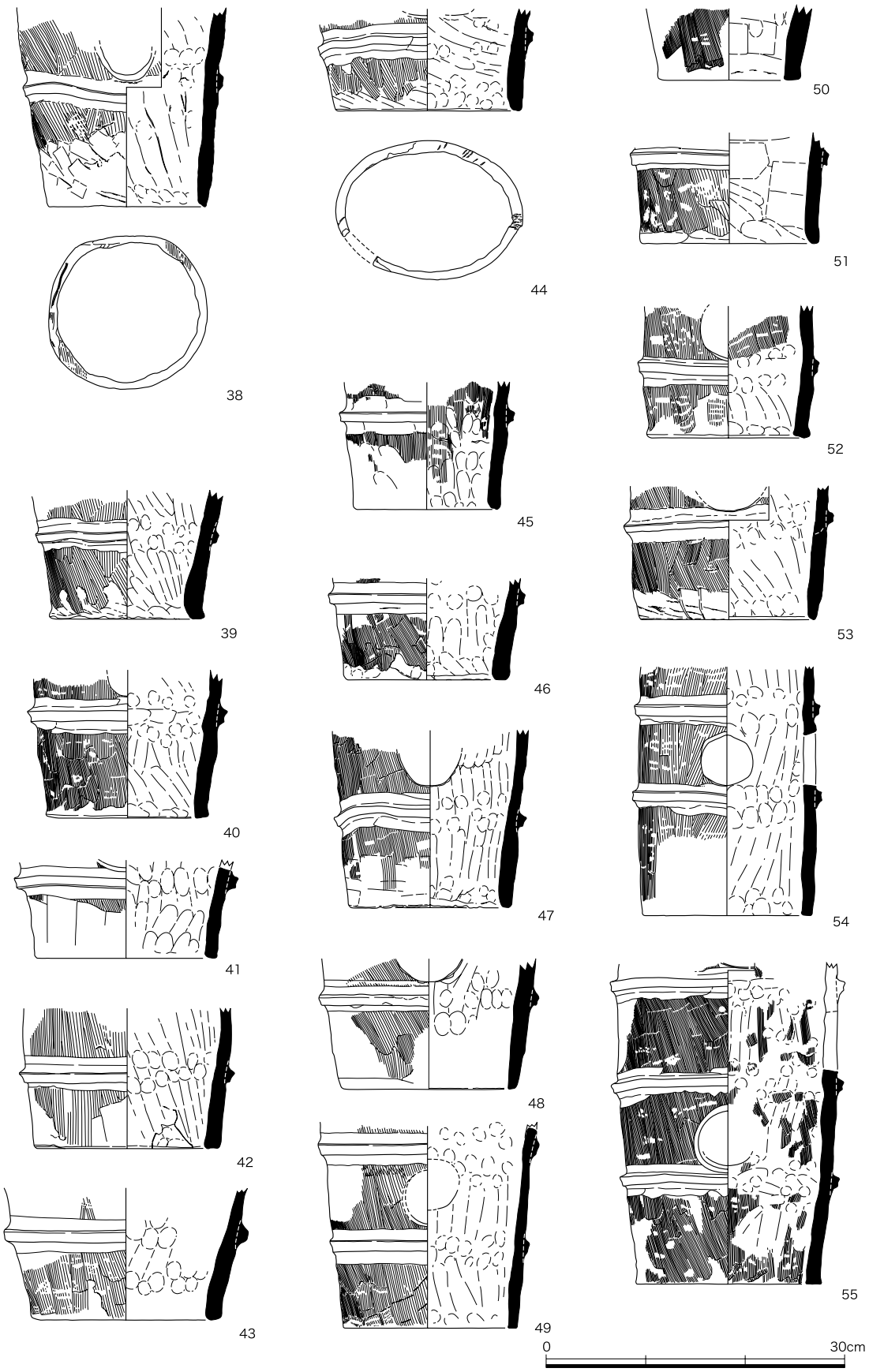
第20図　遺物実測図－2（1/4）



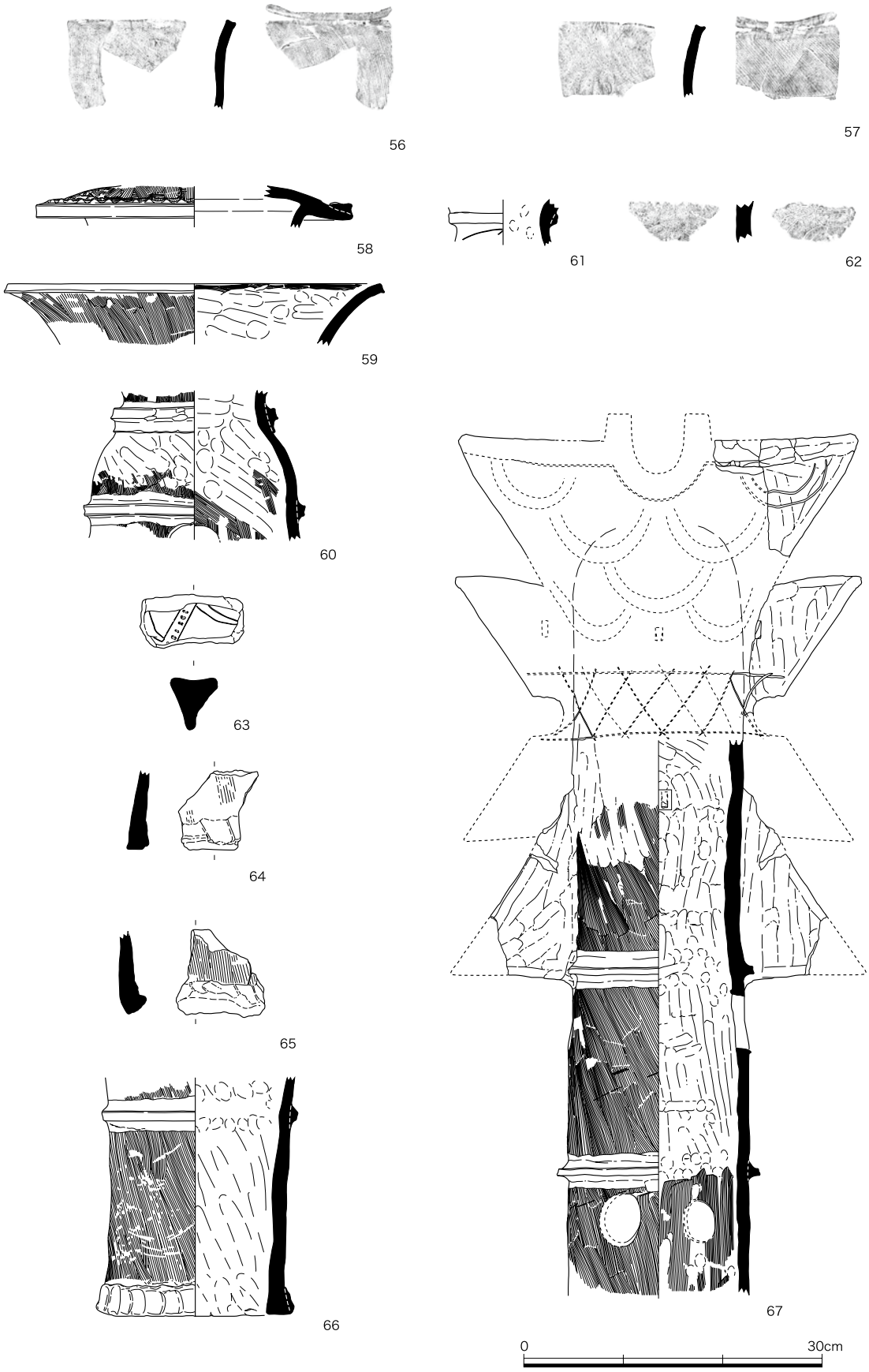
第21図　遺物実測図－３（1/6）



第22図　遺物実測図－4（1/6）



第23図　遺物実測図－５（1/6）



第24図　遺物実測図－6（1/6）

第２章　長岡京跡右京第1002次（７ＡＮＫＨＴ－14地区）調査概要

―右京六条二坊六町、開田遺跡―

長岡京市の長岡京駅前線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

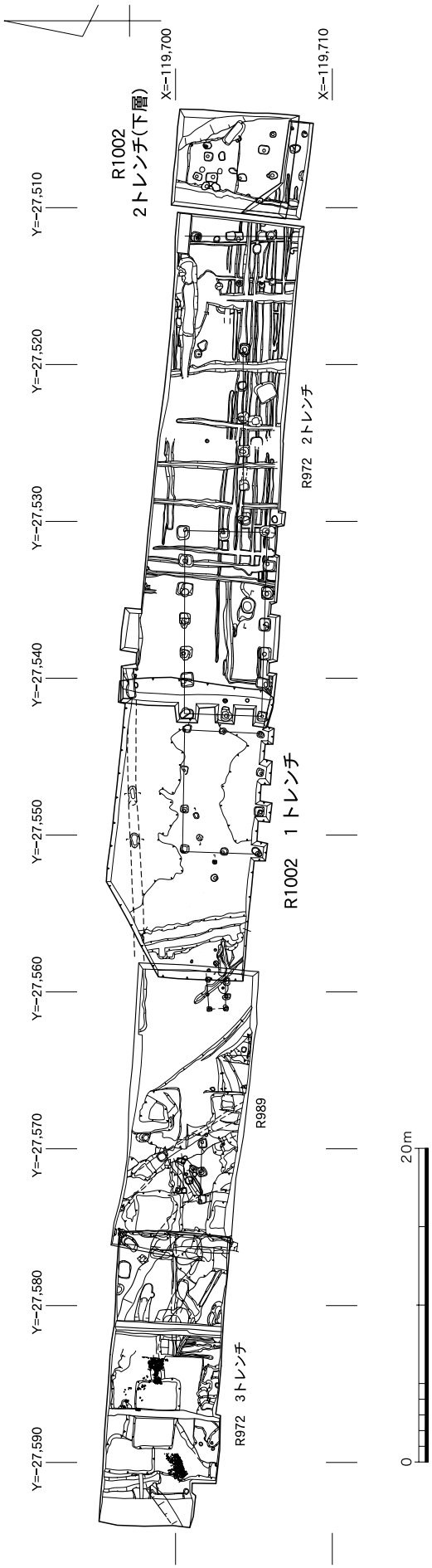
１　調査経過

今回の調査はＪＲ長岡京駅から東西に伸びる長岡京駅前線の拡幅工事に伴って実施したものである。この道路拡幅工事はＪＲ長岡京駅西口地区の市街地再開発事業を契機として進展し、それに伴う発掘調査では弥生時代から江戸時代にかけての数多くの成果があげられている。平成19年度以降は駅の西側を南北に流れる犬川より西側部分の東西約100m部分が対象となり、現在の道路を挟んで北側と南側で拡幅部分での調査が行われている。この拡幅工事以前に道路南側で行われた右京第106次調査[注1]と第173次調査[2]では、古墳時代後期の小規模な前方後円墳が検出され、付近の地名から「塚本古墳」と命名された。墳丘はすでに削平されていたが、周壕内からは大量の埴輪片が出土している。これに関しては第１章を参照されたい。このほかに周辺の調査では長岡京期の遺構が広く分布することが知られており、特に長岡京の西市推定地に近いこともあり関連遺構の検出が期待されるところでもあった。なお調査位置に関しては隣接する一連の調査であることから、第１章の第２図に合わせて記載している。

今回の調査地は道路北側で行われた右京第972次調査[3]２トレンチと右京第989次調査地（第１章）の間に残された部分にあたる。この未掘部分に東西18m、南北９mの矩形トレンチ（１トレンチ）設定したが、北西部は北側にある民家の車出入りのために斜に掘り残すこととした。その後調査の進展に伴い南側に部分的に拡張を行っている。調査は重機による掘削の後、人力にて掘り下げ、精査を行った。１トレンチの調査終了後、完全に埋め戻しを行った後に１トレンチの東30m、道路予定地北東隅部に東西6.5m、南北7.5mの方形トレンチ（２トレンチ）を設定した。この部分は右京第972次調査においてプレハブが設置されていた箇所にあたり、調査が不可能であったことから今回追加調査とし実施したものである。調査終了後は再び埋め戻しを行い、フェンスの復旧、周辺の整備等を行った。１トレンチの調査面積は166.8㎡、２トレンチは48.2㎡、総調査面積は215.0㎡。１トレンチでの中心国土座標値は、Ｘ＝－119,700、Ｙ＝－27,550である。

第25図　１トレンチ作業風景（南東から）

第26図　２トレンチ作業風景（南から）



第27図　調査区配置図（1/400）

2　検出遺構

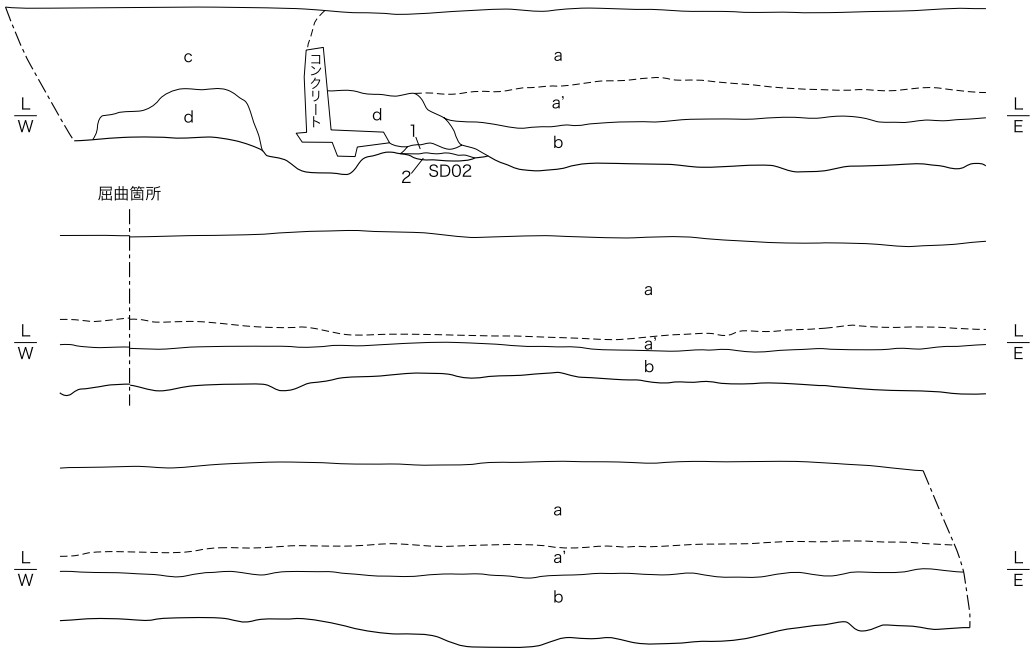
1トレンチ（第28・29図）

先述したごとく、右京第989次調査と右京972次調査２トレンチの間に残された箇所に設けた調査区で、東西18m、南北９ｍで設定した。１トレンチ周辺の標高は19.1ｍである。トレンチの東西端はそれぞれ以前の調査トレンチにわずかに重なっている。調査地の基本層序は、地表下約0.5〜0.6mが以前あった駐車場のバラス層で、さらにその下には厚さ約0.5〜0.6ｍの２層の造成盛り土が存在する。盛り土は地盤改良剤により非常に堅く締まっており、重機による掘り下げ、人力による壁面整形ともに作業は非常に難行した。盛り土の下はすぐに黄褐色粘質土となっていて、地盤改良工事において耕作土・床土および包含層がほとんど削平されていることが判明した。地山面は部分的に深く抉られていて、ほぼ全面に重機の爪痕が残されていた。

調査地の西端には地境のコンクリート基礎が斜方向に残されており、東側裾部には駐車場以前の水田耕作土が畦状に残っていた。コンクリート基礎より西は盛り土と部分的に畑土が残されていて、地山面は東側よりも全体に0.2ｍ高くなっている。北壁の西端ではわずかに包含層の堆積が確認できたが、南側では完全に削平されていた。なお２トレンチの断面図は柱掘方追究のための拡張後のものである。

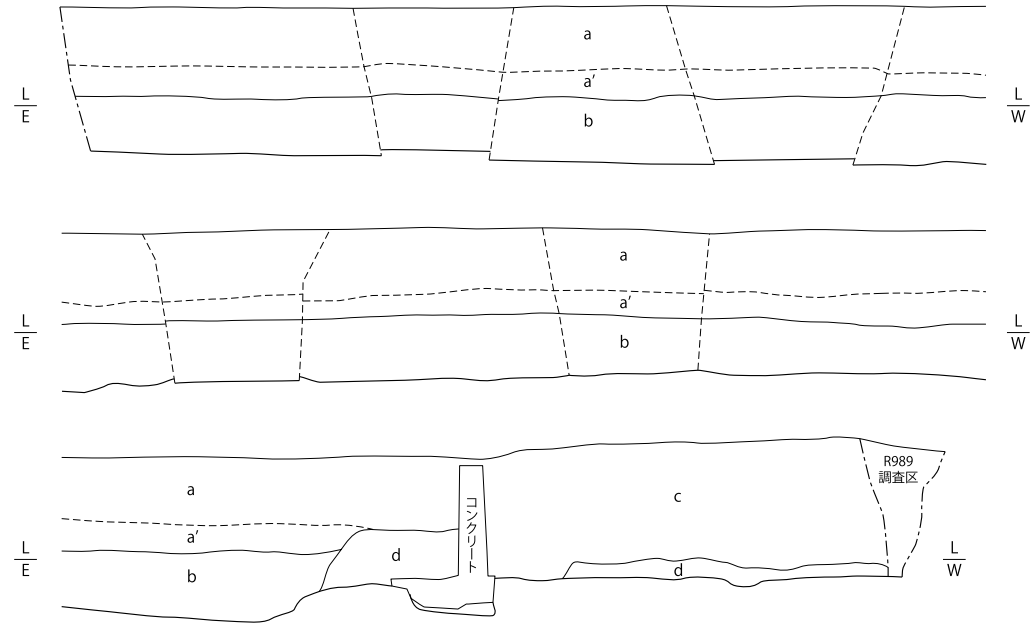
以上のようにかなり削平を受けていたものの黄褐色粘質土の地山面では長岡京期の掘立柱建物１棟、六条条間小路南側溝、ピット３基が検出された。なお右京第972次調査で確認されていた中世溝群は検出されなかった。遺構検出面での標高は東端の一段高い部分で18.3m、西側の削平を受けた部分で18.0〜18.1ｍである。

北壁



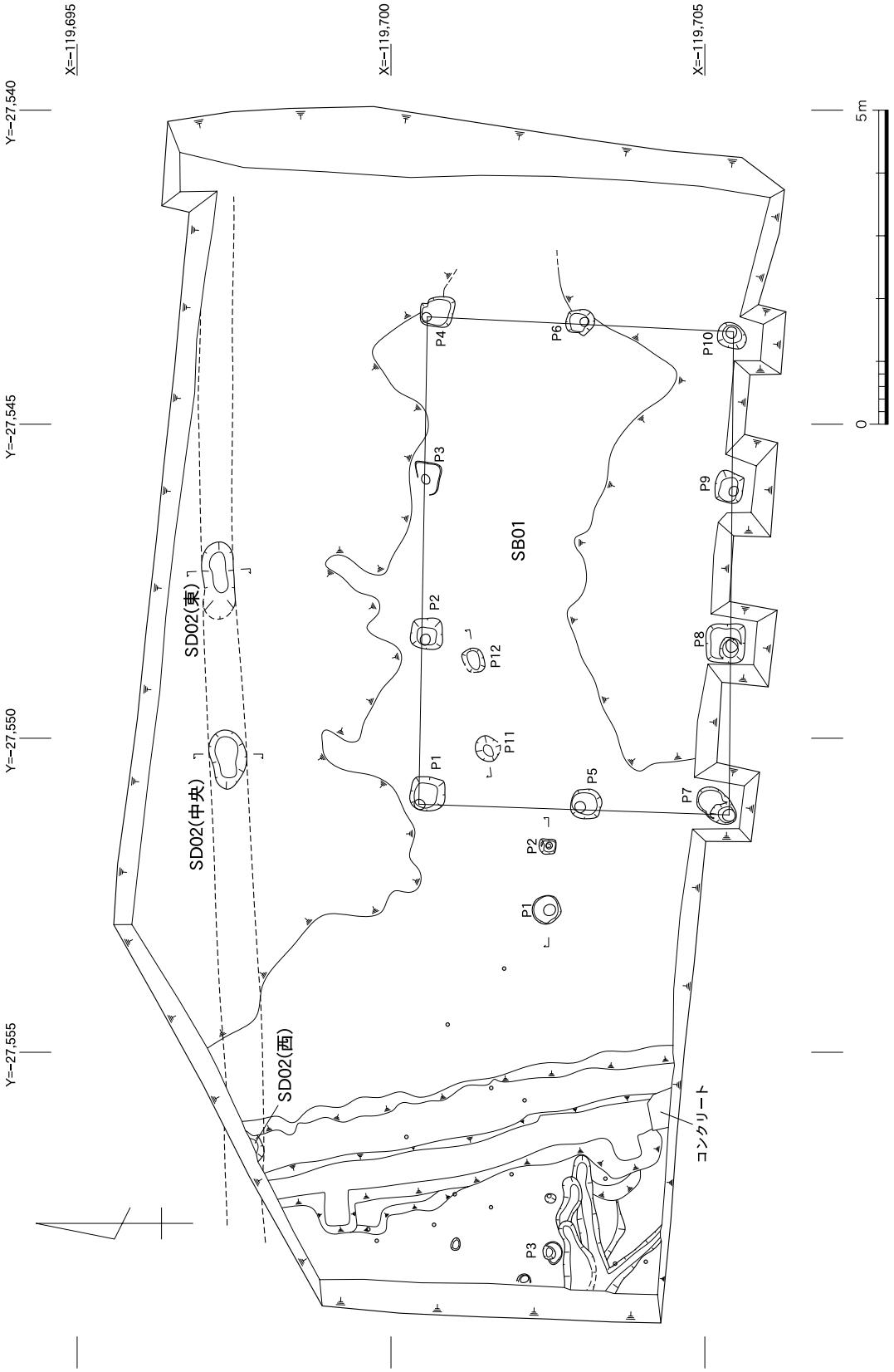
1　にぶい黄褐色粘質土〈10YR5/4〉+灰黄褐色粘質土〈10YR4/2〉
2　黒色粘質土〈10YR2/1〉+灰黄褐色粘質土〈10YR4/2〉
a　盛土Ⅰ　駐車場整地バラス
a'　盛土Ⅱ　駐車場整地改良土(かたくしまる)
b　盛土Ⅲ　改良土(かたくしまる)
c　盛土Ⅳ
d　耕作土

南壁

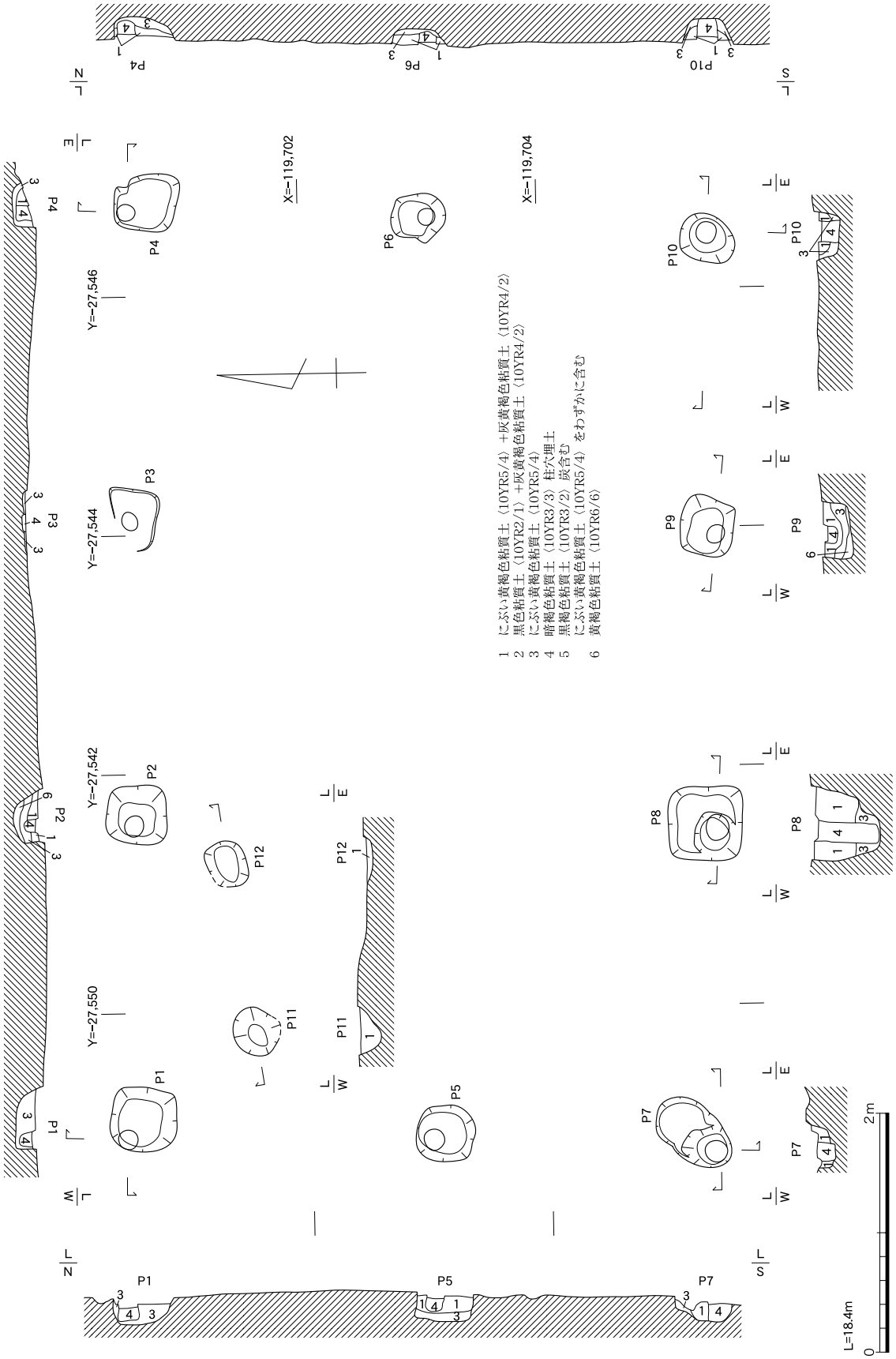


a　盛土Ⅰ　駐車場整地バラス
a'　盛土Ⅱ　駐車場整地改良土（かたくしまる）
b　盛土Ⅲ　改良土（かたくしまる）
c　盛土Ⅳ
d　耕作土

第28図　１トレンチ北壁土層図（1/50）

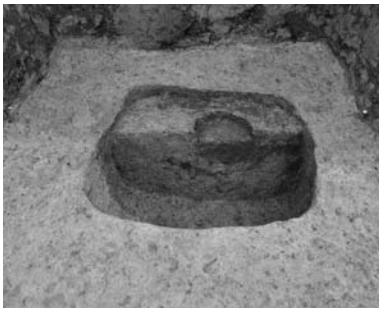


第29図　1トレンチ平面図（1/100）



第30図　掘立柱建物ＳＢ01平面図（1/50）

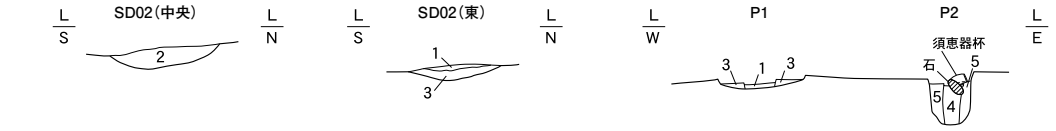
第31図　ＳＢ01－Ｐ8（北から）


第32図　ＳＢ01－Ｐ9（北から）

第33図　ＳＢ01－Ｐ11（南から）

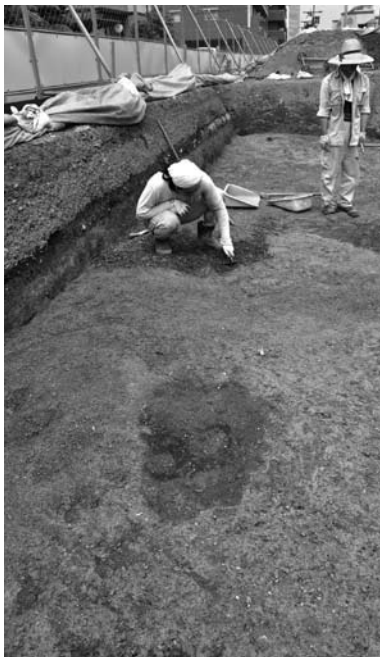
掘立柱建物ＳＢ01（第30～33図）　調査地南半で検出された掘立柱建物で、南北２間、東西３間の東西棟である。南側の柱列は調査区の外に広がることから、柱掘方を中心に部分的に拡張を行った。柱掘方は平面隅円方形から不整方形を呈しており、内部には直径約0.15mの柱痕跡が明瞭に残されている。柱間は不揃いで、南北の柱列は北側の１間が2.5mで南側は2.4mと狭くなっている。東西の柱列は北側は約2.5m等間であるが、南側の柱列は西から2.7m、2.5m、2.5mと西側の１間分が広くなっている。柱の位置も四隅のものは全体に柱掘方の外側に寄っていて（Ｐ－１・４・７）、特に南西隅のＰ－７は当初掘削した掘方の外側にもう一度深く掘り広げた様子が認められる。柱掘方の深さは全体に削平を受けていることから当初よりも浅くなっているが、底面でのレベルを見ると非常に浅く掘られたもの（Ｐ－３・６）と深く掘り込まれたもの（Ｐ－８）があり、特にＰ－８は柱掘方も一辺約0.6mと他のものよりもひと回り大きく作られている。底面のレベル差は0.4mある。さらに柱跡を断面で観察すると、柱が掘方底部に接しておらず、土を入れて高さを調整したものも見られ、Ｐ－２・９では約0.1mの厚さで土を敷いている。隣り合うＰ－８とＰ－９では0.35mの違いが見られる。また建物内部の北西隅には２基の円形を呈する穴（Ｐ－11・12）が残されていた。Ｐ－11は直径0.4m、深さ0.2m、Ｐ－11は直径0.35～0.4m、深さ0.1mで底部はすり鉢上を呈する。おそらく大型の須恵器甕を据え付けた痕跡かと思われるが、建物の柱筋とはやや方向が異なっている。このＳＢ01は東隣の右京第972次調査２トレンチで検出された東西方向の掘立柱建物ＳＢ23とは南北の柱筋を揃えて建てられており、建物同士の間隔は１mと非常に近接している。ただ建物の規模はＳＢ23が東西が長く柱掘方も大きいが、ＳＢ01は前述のように柱間などが均等ではなく、柱の直径からも大きな建物とは考えられないことからＳＢ23に附随する施設と見られる。

溝ＳＤ02（第29・34～36図）　調査地北側で部分的に検出された浅い落ち込みで、検出された位置から六条条間小路南側溝と考えられるものである。先述したごとく調査地全体に大きく削平を受けていることから、条坊側溝の深くなった箇所がかろうじて遺存したものと見られる。西部、中央部、東部の３ケ所で検出された。西部は北壁際のコンクリート壁基礎東に残されていた畦の下にわずかに痕跡が確認された。深さは0.1m弱である。中央部と東部はトレンチ北辺中央で検出された。約２mの間隔で東西に並び、幅は0.5～0.6m、深さは0.1mである。非常に浅いため掘り上げ状態では痕跡はほとんど確認できない（第36図）。埋土は西部と中央部は黒色粘質土、東部はにぶい黄褐色粘質土とそれに灰黄褐色粘質土が混じった層の２層からなる。いずれも遺物は



1　にぶい黄褐色粘質土〈10YR5/4〉
　+灰黄褐色粘質土〈10YR4/2〉
2　黒色粘質土〈10YR2/1〉+灰黄褐色粘質土〈10YR4/2〉
3　にぶい黄褐色粘質土〈10YR5/4〉
4　暗褐色粘質土〈10YR3/3〉柱穴埋土
5　黒褐色粘質土〈10YR3/2〉炭含む
　にぶい黄褐色粘質土〈10YR5/4〉をわずかに含む
6　黄褐色粘質土〈10YR6/6〉

第34図　溝ＳＤ02、Ｐ１・２断面図（1/40）



第35図　溝ＳＤ02（西から）

第36図　溝ＳＤ02断面（東から）

第37図 Ｐ２検出状況１（南から）

第38図 Ｐ２検出状況２（南から）

出土していない。これらの溝の延長部は東側の右京第972次調査２トレンチと西側の右京第989次調査で検出されていて、直線的に並ぶが、東で北に約２°振れており（第27図）、正方位を指向しない。中央部の溝の国土座標はＸ＝－119,697.4、Ｙ＝－27,550.3、東部の国土座標はＸ＝－119,697.3、Ｙ＝－27,547.3である。

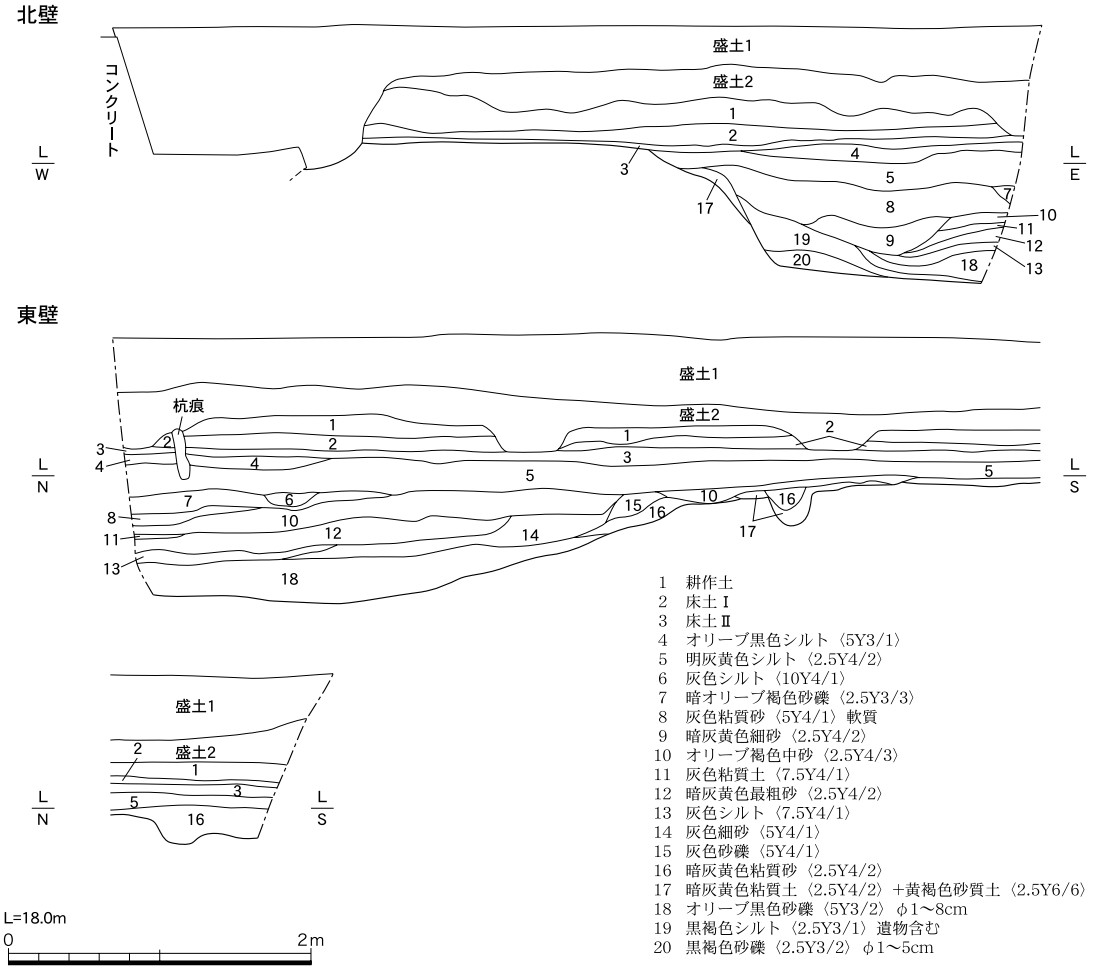
Ｐ－１～３（第29・34・37・38図）　建物などとしてはまとまらないピットが３基検出されているが、周辺のピットが削平を受けている可能性もある。Ｐ－１・２は掘立柱建物ＳＢ01のすぐ西側で東西に並んで検出されている。Ｐ－１は平面円形で直径0.45m、深さは0.1mと浅く、直径0.15mの柱痕が残る。一方Ｐ－２は平面隅円方形で、一辺0.25m、深さは0.3mと深い。直径0.1mの柱痕があり、この小さな穴の中に土師器の杯・皿片や須恵器鉢などが入っていた（第37図）。さらに堀方内からも須恵器杯Ｂ片が出土しており（第38図）小型のピットながら遺物は多い。祭祀の可能性もあるがいずれも破片であり、炭片などと一緒に出土していることから塵芥として処理されたものと見られる。ちなみにＰ－１との間隔は１ｍであるが、平面形態や深さが異なることから関連性は薄いと考えられる。Ｐ－３はトレンチ西端の一段高い箇所から検出されたもので、平面は不整円形を呈し、直径0.35mで柱痕は確認できなかった。西隣の右京第989次調査で検出された掘立柱建物ＳＢ14の東に位置するが、柱筋が揃わないため別のピットとして扱っている。

２トレンチ（第39～40図）

右京第972次調査２トレンチの北東部に設けたもので、以前の調査時にプレハブが設置されていたことから、今回２トレンチとして追加調査を行ったものである。調査は土置場の関係上１トレンチの調査終了後完全に埋め戻しを行い、改めてトレンチを設定して重機による掘削を行った。トレンチの西側にはコンクリート擁壁があり、それに沿って東西6.5m、南北7.5mの方形トレンチを設定したが、南西隅は右京第972次調査のトレンチと部分的に重なっている。なおトレンチ周辺の標高は18.9mである。２トレンチの基本層序は、厚さ約0.5m前後の２層の盛り土の下に旧耕作土（第１層）と床土（第２・３層）が厚さ約0.2～0.3mであり、これらを除去すると部分的に黄褐色粘質土の地山面が表れる。この面で調査地東辺部において溝ＳＤ03とそれに切られる形で東西方向の中世の小溝群を検出した（上層遺構）。さらにこれらを掘り上げると、ほぼ同じ面で長岡京期の遺物を含む落ち込みと柱穴群が検出された（下層遺構）。なおトレンチ中央東寄りには長方形の電柱のワイヤー支柱基礎がある。検出面での標高は18.1mである。

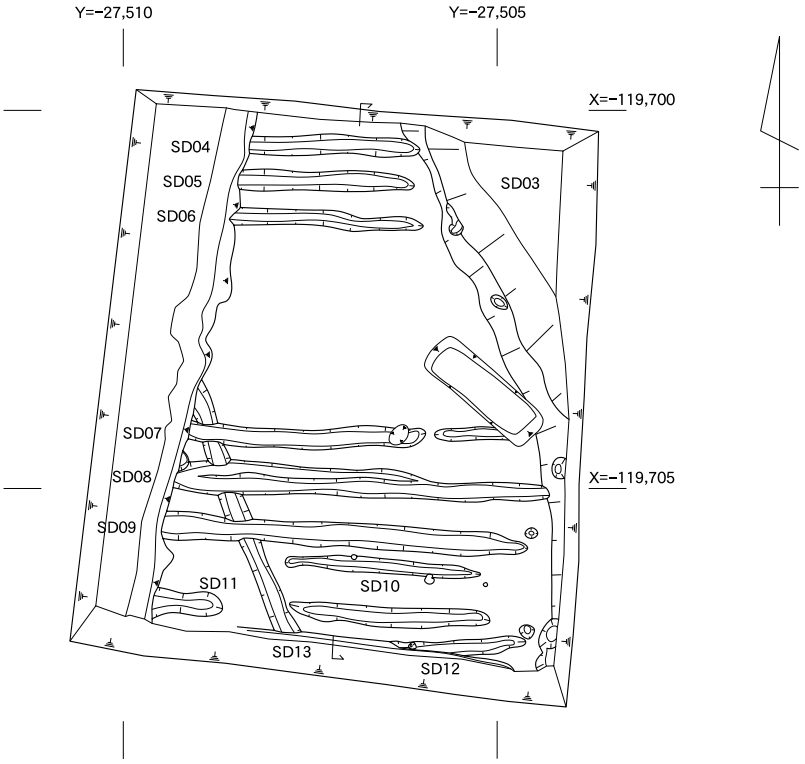
上層遺構

溝ＳＤ03（第39～41図）　２トレンチの東側で検出された、わずかに蛇行しながら北北西から南南東に流れる溝である。幅は北側で2.5m以上、深さは095.mで、溝肩は上部はなだらかである

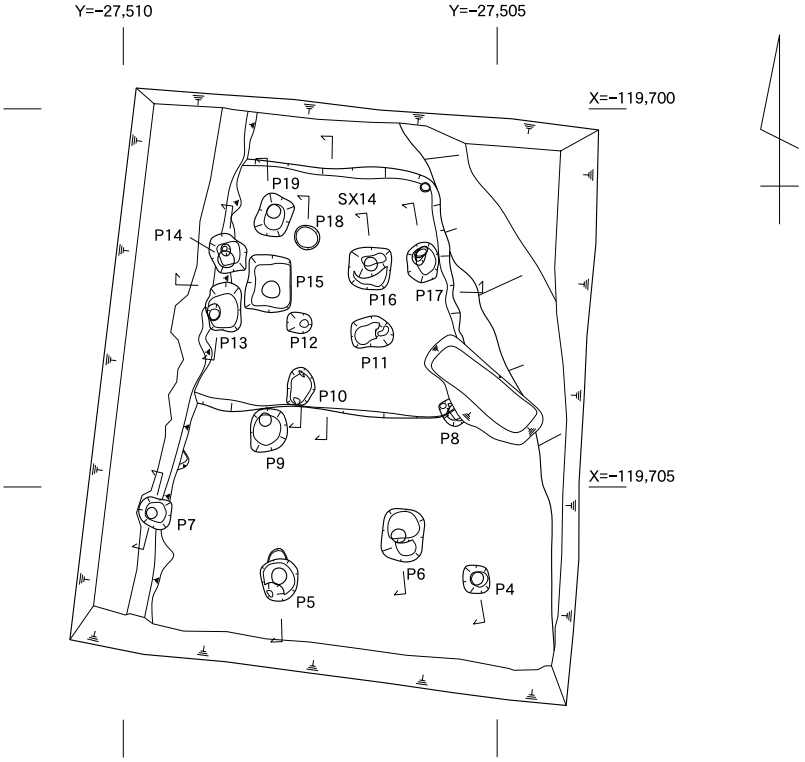


第39図　２トレンチ北壁・東壁土層図（1/50）

上層



下層



第40図　２トレンチ平面図（1/100）

第41図　溝ＳＤ03（南から）

が途中で急に落ち込み、底部は平坦である。溝肩のなだらかな部分には円形の杭または柱掘方と見られる痕跡が１～２ｍ間隔で確認される。柱痕は確認できなかった。埋土は最上層に0.25ｍのシルト層があり、それ以下は砂礫、砂、シルト、粘質土の薄い堆積が続いている。堆積状況から一定の水流があったものと見られる。堆積土内の遺物は非常に少なく、時期の決定は困難であるが、鎌倉時代の東西溝を切っていることから、現段階では江戸時代以降のものと推定している。現在東側を南北に流れる犬川の旧流路の可能性も考えられる。

溝ＳＤ04～13（第40・44図）　ほぼ調査地全面で検出された東西方向を主とする小溝群である。幅は0.2～0.3ｍ、深さ0.1～0.15ｍで、このうち溝ＳＤ08は中央付近で２段に落ち込んでおり、もう１条溝が切り合っている可能性もある。また部分的に途切れるものもある。北側の溝ＳＤ04～06は0.5ｍ間隔で並び、2.7ｍ南側で再び溝ＳＤ07から溝ＳＤ12まで約0.5ｍ間隔で並ぶ。これらの他に１条のみ斜方向に走る溝ＳＤ13があり、切り合いから東西方向の溝群より先に作られたものである。溝内の埋土はいずれもにぶい黄褐色砂質土で、内部に瓦器の小片を含んでいる。

下層遺構

落込みＳＸ14（第40・42～44図）　調査地北半で検出された落ち込みである。西側をコンクリート擁壁で破壊されているため、本来の規模・形状は不明であるが、現状では平面台形を呈する。南北3.2ｍ、東西は南辺部で3.5ｍ、深さは0.25ｍで、南北の肩は直線的に落込み、底部は多少の凹凸はあるがほぼ平坦である。埋土は２層からなり、上層は暗褐色粘質土と明黄褐色粘質土をわずかに含む土で、多くの長岡京期の遺物を包含していた。また炭や焼土を多く含んでおり、塵芥処理の土坑と見られるものである。下層は明黄褐色粘質土に黄褐色粘質土が混ざったもので、部分的に薄く堆積していた。遺物はまったく含んでいない。遺物はほぼ全体から出土しており、い

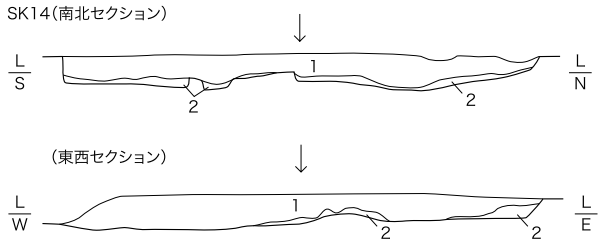
第42図　落込みＳＸ14全景（東から）

第43図　落込みＳＸ14遺物出土状況（南から）

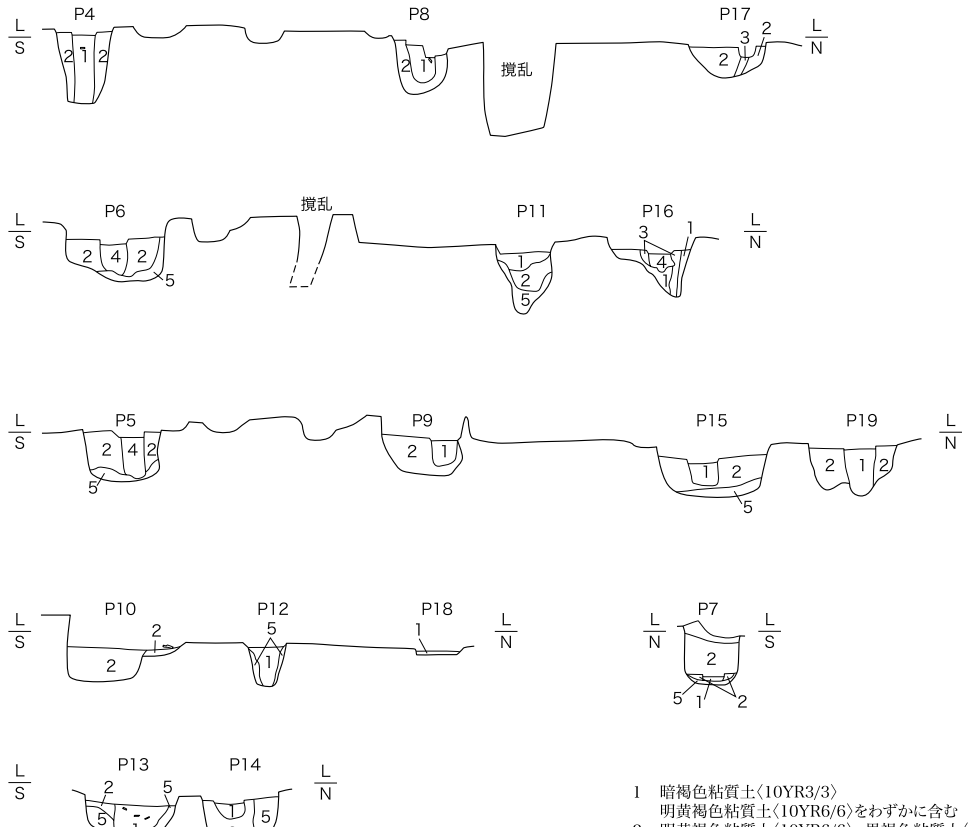
上層溝断面

1　にぶい黄褐色砂質土〈10YR4/3〉

下層溝断面



1　暗褐灰色粘質土〈10YR3/3〉
　明黄褐色粘質土〈10YR6/6〉をブロックにわずかに含む
　炭・焼土・遺物を多く含む
2　明黄褐色粘質土〈10YR6/6〉+暗褐色粘質土〈10YR3/3〉



1　暗褐色粘質土〈10YR3/3〉
　明黄褐色粘質土〈10YR6/6〉をわずかに含む　炭含む
2　明黄褐色粘質土〈10YR6/6〉+黒褐色粘質土〈10YR3/1〉
3　暗褐色粘質土〈10YR3/3〉
4　黒褐色粘質土〈10YR3/1〉
5　明黄褐色砂質土〈10YR6/6〉

第44図　２トレンチ検出遺構断面図（1/50）

ずれも破片である。また底部中央付近では須恵器甕の体部片がまとまって出土している。

落ち込みを掘り上げると底部からピットが多数検出された。南側のものもあわせ、平面は不整円形ないし隅円方形を呈し、ほぼ正方位に近いことから大半は長岡京期の遺構と見られるものである。ただし狭い調査範囲でもあり、建物あるいは柵列としての認識は困難であるため、基本的に南北方向に断ち割りを行い、断面記録をとっている。（第40・44図）

Ｐ－４・８・17　調査トレンチ東端で検出されており、北で西に振れている。柱堀方はＰ－17が一辺0.4～0.5m、Ｐ－４・８が一辺0.35mとひと回り小さく、柱間はほぼ2.2mである。深さは南から0.5m、0.4m、0.2mと浅くなり、直径約0.15mの柱痕が残る。

Ｐ－６・11・16　落込みＳＸ14底部検出の２基とその南側から検出されたもので、Ｐ－11は不整方形で一辺0.4～0.55m、Ｐ－６・16は隅円方形で一辺0.55～0.7mである。深さは0.4～05mで柱痕はＰ－６・16のみに認められ、直径は0.15m、柱間は3.6mである。

Ｐ－10・12・18　いずれも落込みＳＸ14底部から検出されたもので、平面形態、深さなど全て異なっており、柱痕はなく関連性は希薄と見られる。このうち南側のＰ－10は南北0.5m、東西0.35mの楕円形で、深さは0.3mで南寄りの底部付近で土師器椀Ａ（第45図－38）が出土している。

Ｐ－５・９・15・19　いずれも方形ないし隅円方形で並びは最も正方位に近い。Ｐ－15は一番大きく0.55～0.75m、他は一辺0.4～0.55mで、深さは0.35～0.4mである。柱痕は直径0.15mであるが、柱間は南から2.1m、1.7m、1.1mと不等間で同一の施設かは断定できない。

Ｐ－13・14・Ｐ－７　調査地西端で検出されたもので、単独のピットとして認識しているものである。平面不整方形ないし隅円方形で、0.45～0.7m、深さ0.3～0.4m。直径役0.15mの柱痕が残る。これらのピット群は方位や距離などから東西の位置関係はセットが見い出し難い。

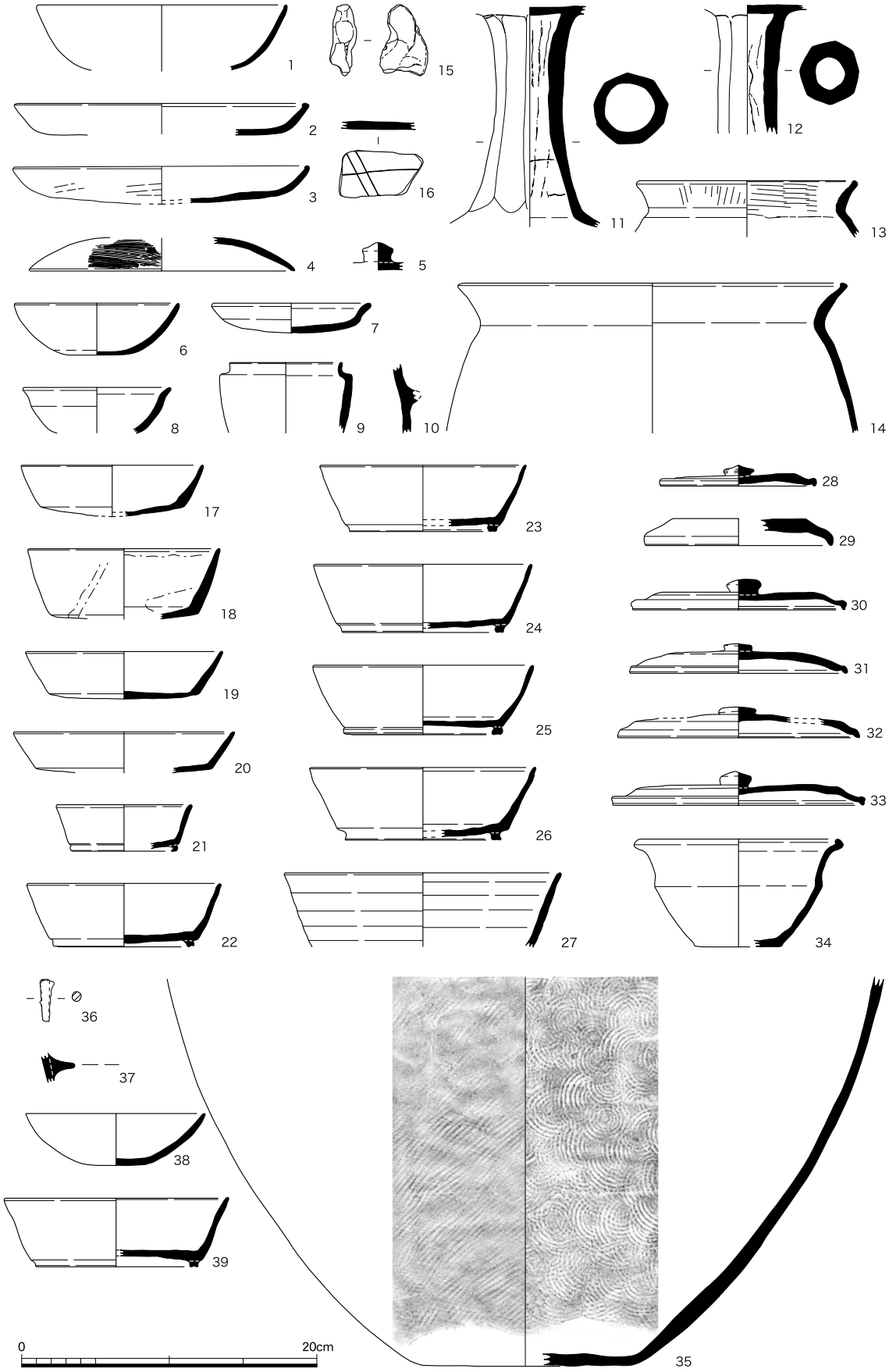
なお西側で行われた右京第972次調査で検出された南北の柱列ＳＢ32と、今回検出されたＰ－５・９・15・19は約3.8mの間隔で平行しており（第27図）、一連の遺構とも考えられるが、先述のごとくＰ－５・９・15・19は柱間が不等間で柱列ＳＢ32の柱間とも揃わないため現段階では別の遺構と判断している。

３　出土遺物

今回の調査で出土した遺物はコンテナ２箱と調査面積に比して少量で、ほとんどが長岡京期の遺物である。その大半は２トレンチの落込みＳＸ14出土のもので占められ、次いで掘方内出土のものとなるが、これらは非常に少量、小片のものが多い。この他に江戸時代の溝ＳＤ03と中世溝群出土遺物があるが、これらも非常に少量、小片で図示できるものは非常にわずかである。

落込みＳＸ14出土遺物（第45図－1～35）　検出遺構でも述べたように長岡京廃都時の塵芥処理土坑と見られるもので、炭、焼土とともに多数の土器が出土している。出土破片数は付表－３に示したように総数2312点で、そのうちの82.1％が土師器、須恵器は17.8％となり、土師器が最も多い。この他に黒色土器0.1％、土馬などの土製品がわずかに確認される。

土師器には、杯Ａ・Ｂ、杯Ｂ蓋、皿Ａ・Ｃ、椀Ａ、高杯、甕等があり、このうち食器類が８割



第45図　出土遺物実測図（1/4）

付表－３　落ち込みSX14出土土器破片計数表

器種	器形	破片数	比率（%）	
土師器	杯・椀・皿	1578	83.1%	82.1%
	高杯・盤・鉢	24	1.3%	
	甕・羽釜	242	12.8%	
	その他	3	0.2%	
	製塩土器	48	2.5%	
	不明	3	0.2%	
	小計	1898	100.0%	
須恵器	杯・椀・皿	286	69.6%	17.8%
	壺・瓶	25	6.1%	
	鉢・盤	2	0.5%	
	甕・大型壺	97	23.6%	
	その他	0	0.0%	
	不明	1	0.2%	
	小計	411	100.0%	
黒色土器	杯・椀・皿	3	100.0%	0.1%
	甕	0	0.0%	
	その他	0	0.0%	
	不明	0	0.0%	
	小計	3	100.0%	
	総計	2312		100.0%

強を占めている。全体の出土量は須恵器よりも多いが、全体に遺物の残りが悪く、またほとんどのものが細片化していて、接合出来るものが非常に少ない。このため実測可能な遺物は限られる。

１は口径17cmに復元される杯Ａの破片で、摩滅により外面調整は不明である。２・３の皿Ａは、端部を丸く納め、直径は20.1～20.2cmである。摩滅しているが、３は外面全体をヘラケズリするｃ手法である。４・５は杯Ｂ蓋で、４は口径18.0cmの口縁部片である。天井部には横方向の密なヘラミガキを施す。５はつまみ部の小片である。６は口径11.2cmの椀Ａで、内外面はほとんど摩滅しているが、わずかに外面ヘラケズリが残る。７は皿Ｃで、3／5が残る。口縁部横ナデ、底部外面は不調整である。口径10.8cm、器高2.0cm。８は壺Ｃで、口縁部はヨコナデし、外面は不調整である。人面などの墨書は確認できない。９は壺Ｅの小片で、口径7.6cmである。全体に摩滅が著しく調整不明である。11・12は高杯脚部片で、脚部は粘土を積み上げた後面取りし、11は９面、12は８面である。内面には絞り痕が残る。13・14は甕Ａで13は口径14.0cm、14は口径26.4cmである。13は口縁部内外面にハケメが残る。10は全体に摩滅が著しいが、体部に把手を有する甕Ｂとみられる小片である。15は土馬の頭部片で、これも摩滅が著しいが、わずかに竹管の刺突による目が確認できる。16は杯または皿の底部外面に「×」を線刻したものである。

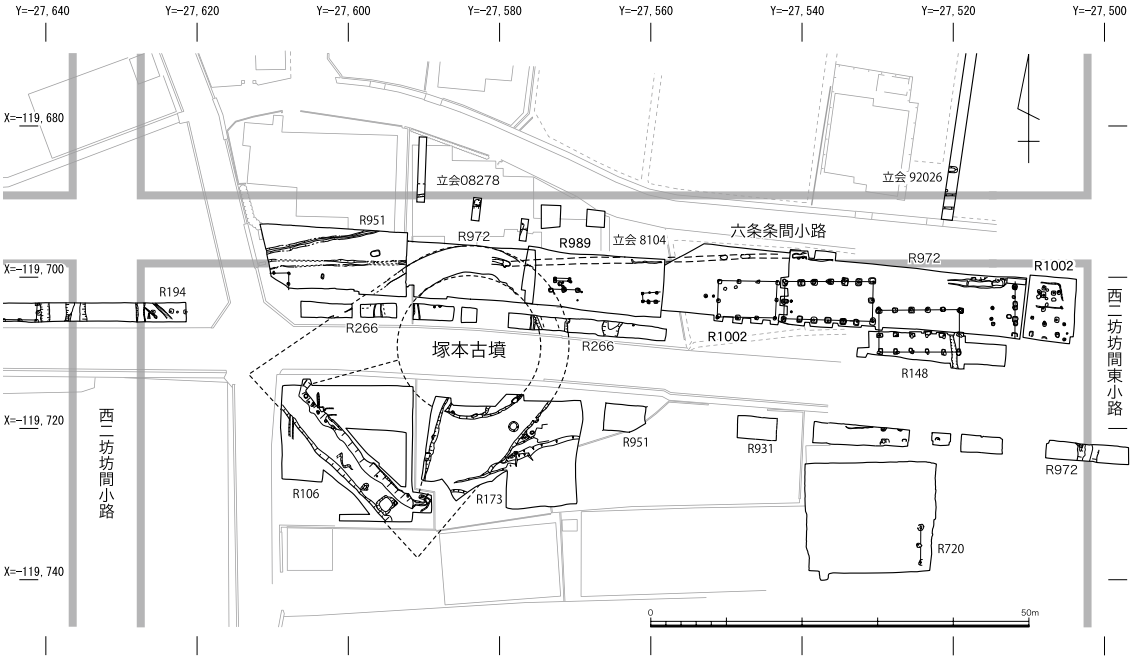
須恵器は出土破片数は土師器に比べて少ないものの図示出来るものは多い。杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｂ蓋、壺Ｈ、甕のほかに、図示していないが壺Ｇ、鉢などがある。こちらも土師器と同様食器類が多く約７割を占め、大きさもバラエティーに富む。杯Ａは器高が３cm前後の浅いもの（17・19・20）、と約５cmの深いもの（18）があり、口径は12.4～13.4cm（17～19）と15cmがある。いずれも軟質で灰白色を呈し、18は内面に漆が付着する。杯Ｂは口径9.2cm（21）、13.2～15.4cmのもの（22～26）、18.8cmのもの（27）があり、杯Ｂ蓋もそれに対応して直径10.7～12.8cmのもの（28・29）、と14.4～17.1cm（30～33）があるが、口径18.8cmの杯に対応するものは出土していない。口縁端部は屈曲するもの（28・30・33）と緩やかなもの（29・31・32）があり、つまみは宝珠形のもの（28・30・33）と、扁平なボタン状のもの（31・32）がある。壺Ｈ（34）は破片を図上復元したもので、口径14.2cm、器高7.3cmに復元される。焼成軟質で表面は摩滅しており、底部の糸切り痕は残っていない。35は甕の底部周辺の破片である。内面には同心円の当て具痕、外面には平行タタキが残される。38は２トレンチＰ－10出土の土師器椀Ａで、約1／2が残る。口径12.2cm、器高3.7cmで、外面は摩滅のため調整不明である。39は１トレンチのＰ－２掘方内出土の須恵器杯Ｂで、口径15.2cm、器高4.7cm。36は２トレンチＰ－13出土の鉄釘片である。37は溝ＳＤ03下層出土の羽釜の小片で、唯一図化できたもの。断面三角の鍔部を貼り付け、体部外面には煤が付着する。

４　まとめ

今回の調査では、道路拡幅予定地のうち昨年行われた右京第972次調査２トレンチと右京第989次調査トレンチの間に１トレンチを、同じく右京第972次調査２トレンチの北東部に２トレンチを設けて調査を行った。その結果、１トレンチでは長岡京期の遺構が、２トレンチでは中世遺構と長岡京期の遺構が検出された。

１トレンチは以前の駐車場建設時に地盤改良のため大きく削平を受けており、おそらく存在したであろう中世の溝群は検出されなかった。かろうじて残された長岡京期の遺構は、掘立柱建物ＳＢ01と単独ピット、そして部分的に残された六条条間小路南側溝ＳＤ02のみであった。掘立柱建物ＳＢ01は、検出遺構でも述べたように、東隣の右京第972次調査２トレンチで検出された掘立柱建物ＳＢ23と柱筋を揃えた一連の施設と見られる。このＳＢ23のすぐ東側では掘立柱建物ＳＢ31が検出されており、これはすぐ南で行われた右京第148地調[(4)]査で検出された建物の続きと見られるものである。この２棟の建物は柱筋は揃わないものの非常に近接して建てられており、六条条間小路のすぐ南側に、密集した建物が東西に３棟並ぶという状況が明かとなった。

また六条条間小路南側溝は第972次、第989次、第1002次で断続的に検出されているが、塚本古墳の周壕を境に徐々に北側に振れており、短い検出距離としては極めて特異な状況だといえよう。この塚本古墳に関しては、長岡京の造営に伴って削平を受けた古墳の一つと考えられているが六条条間小路との関係で、単純な状況ではないことが判明しつつある。第１章においても新たな見解が示されているように検討すべき点が多々あり、この側溝の振れも関連するものと思われる。今回の調査では塚本古墳にはかかっていないために、直接言及出来るものではないが、今後検討すべき点である。



第46図　調査地周辺図（1/1000）

２トレンチでは廃都時の塵芥処理土坑と見られる落込みＳＸ14とそれに切られるピット群が検出された。検出位置は右京六条二坊六町の北東隅、推定される条坊交差点からは３ｍの位置にある角地である。このような地点からも塵芥処理施設として妥当な場所とも考えられる。またＳＸ14に切られたピット群は基本的に南北方向に並ぶものが多いようであり、西二坊坊間東小路に面した建物ないし柵列の一部と見られる。このことは先述した六条条間小路に面して建物群が並んでいたのと同様に西二坊坊間東小路のすぐ西側にも建物が並んでいた可能性も考えられる。部分的な検出のため不明な点は多いが、当地周辺は長岡京の西市の推定地にもあたることから、このような状況と関連する可能性も指摘できよう。塚本古墳周辺の条坊のあり方と合わせ今後検討すべき点といえよう。　（木村泰彦）

注１）近澤豊明・木村泰彦「長岡京跡右京第106次調査概要」『長岡京市センター報告書』第１集　1984年
２）木村泰彦「右京第173次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和59年度　1985年
３）原　秀樹「長岡京跡右京第972次発掘調査報告」『長岡京市センター報告書』第53集　2010年
４）黒坪一樹「長岡京跡右京第148次発掘調査概要」『京都府センター概報』第11冊　1984年

付表－３　報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ　だい５４しゅう
書名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書　第５４集
副書名	
シリーズ名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第５４集
編集者名	木村泰彦
編集機関	財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617－0853　京都府長岡京市奥海印寺東条10－1

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
長岡京跡（ながおかきょうあと）（右京第989次） 開田遺跡（かいでんいせき） 塚本古墳（つかもとこふん）	長岡京市開田３丁目702-13の一部、702-14の一部	26209	107 80 78	34°55′13″	135°41′53″	20100201 ～ 20100310	道路拡幅工事
長岡京跡（ながおかきょうあと）（右京第1002次） 開田遺跡（かいでんいせき）	長岡京市開田３丁目702-13･14の一部他	26209	107 80	34°55′13″	135°41′54″	20100614 ～ 20100727	道路拡幅工事

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡（右京第989次）	都城	長岡京期	掘立柱建物、条坊側溝	土師器、須恵器	六条条間小路南側溝
開田遺跡	集落	鎌倉時代	溝	土師器、瓦器	
塚本古墳	古墳	古墳時代	塚本古墳周濠	埴輪、須恵器	後円部周濠
長岡京跡（右京第1002次）	都城	長岡京期	掘立柱建物、条坊側溝 落ち込み	土師器、須恵器	六条条間小路南側溝
開田遺跡	集落	鎌倉時代	溝	土師器、瓦器	

図　　版

（１）調査区西半部（東から）

（２）塚本古墳周濠ＳＤ37検出状況（北西から）

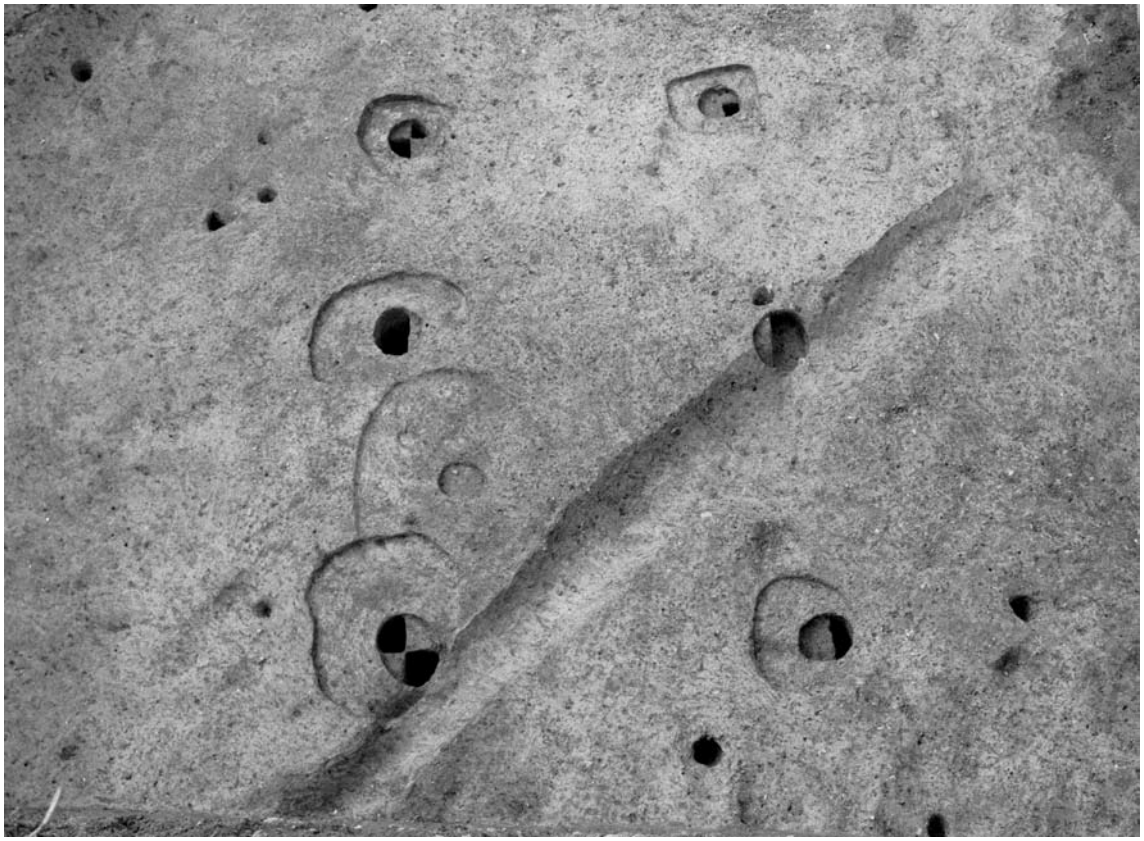
長岡京跡右京第989次調査

（１）塚本古墳周濠ＳＤ37埴輪出土状況（北から）

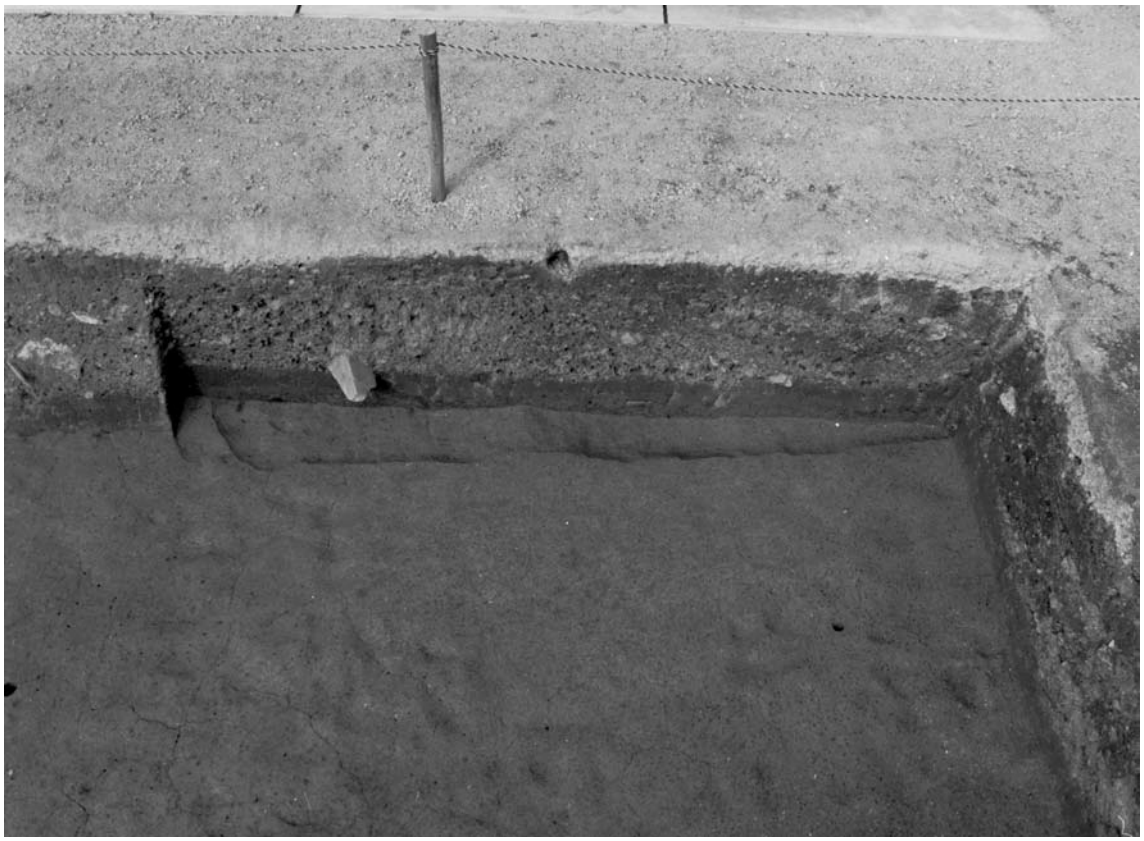
（２）塚本古墳周濠ＳＤ37完掘状況（北東から）

（１）掘立柱建物ＳＢ18（北西から）

（２）掘立柱建物ＳＢ18と近隣柱穴群（西から）



（1）掘立柱建物ＳＢ14（東から）



（2）溝ＳＤ12（南から）

（1）調査区全景（東から）

（2）調査区全景（西から）

（3）調査区全景（東から）

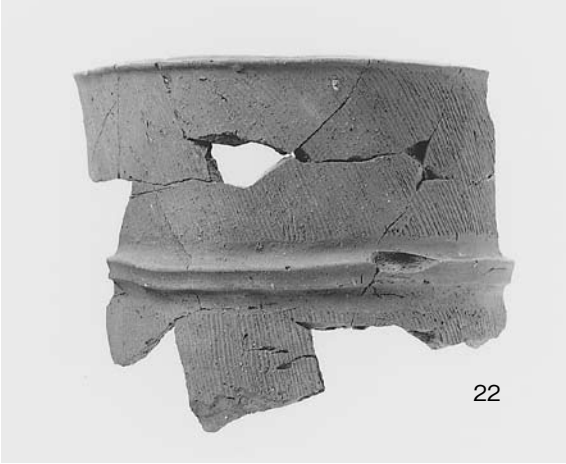
長岡京跡右京第989次調査

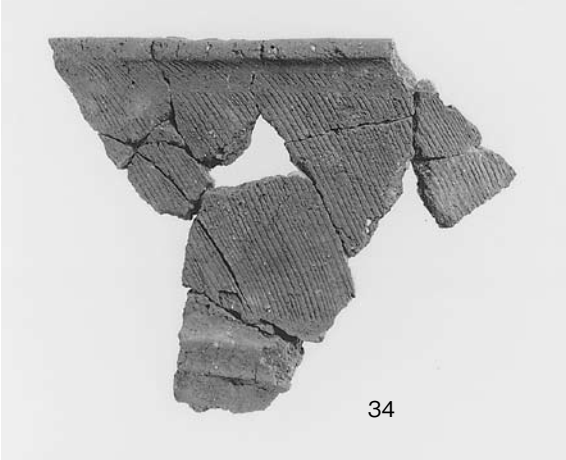
（1）出土埴輪

（2）出土遺物

出土遺物

図版八





出土遺物

（1）調査地全景（東から）

（2）調査地全景（西から）

長岡京跡右京第1002次調査

（1）１トレンチ全景（東から）

（2）掘立柱建物ＳＢ01（北から）

（1）２トレンチ上層遺構（西から）

（2）２トレンチ上層遺構（南から）

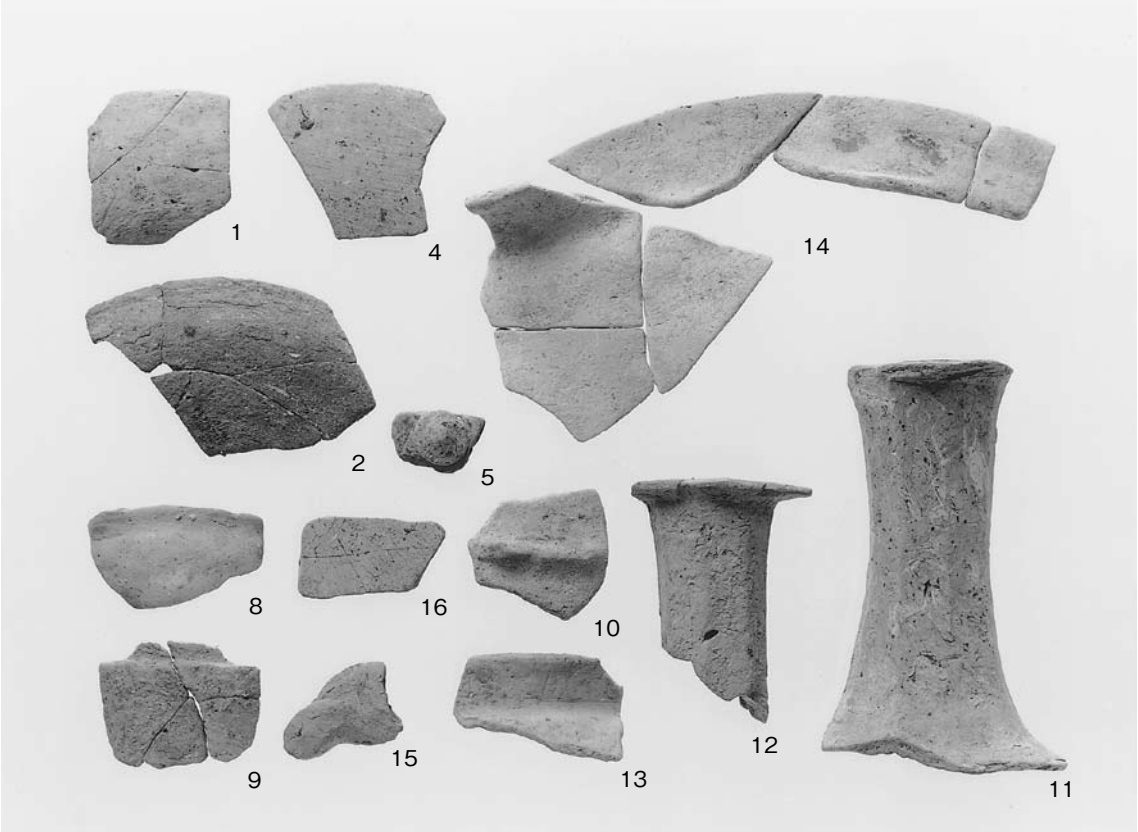
長岡京跡右京第1002次調査

（1）２トレンチ下層遺構（西から）

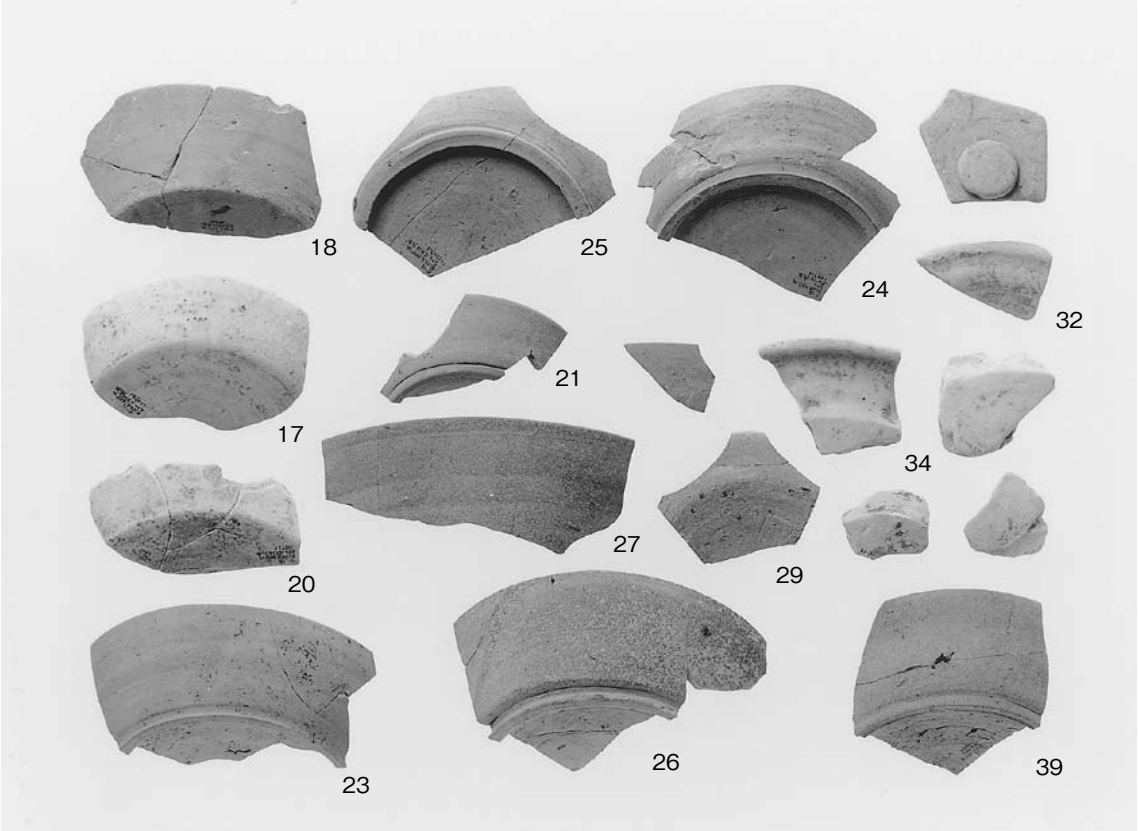
（2）２トレンチ下層遺構（南から）

出土遺物

長岡京跡右京第1002次調査



（1）出土土師器



（2）出土須恵器

長岡京市埋蔵文化財調査報告書　第54集

平成22年12月20日　印刷
平成22年12月22日　発行

編集発行　財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
〒617－0853　京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1
電話　075－955－3622
FAX　075－951－0427

印　　刷　山代印刷株式会社
〒602－0062　京都市上京区寺之内通小川西入
電話　075－441－8177～8(代)
FAX　075－441－8179